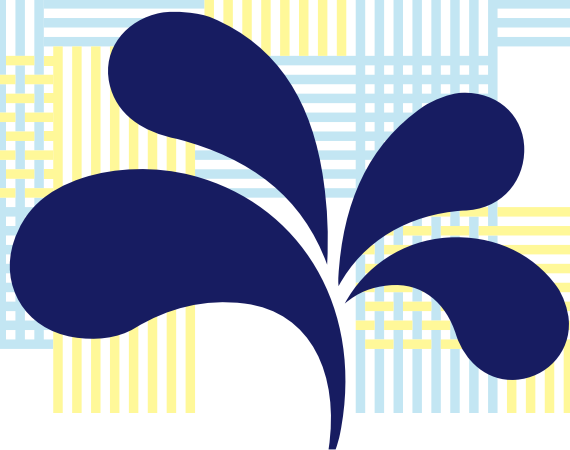




日本の心を世界に伝える
Conveying the Spirit of Japan

第14回 文化庁文化交流使活動報告会

文化庁文化交流使 フォーラム 2016秋

Japan Cultural Envoy Forum 2016 Autumn

報 告 書

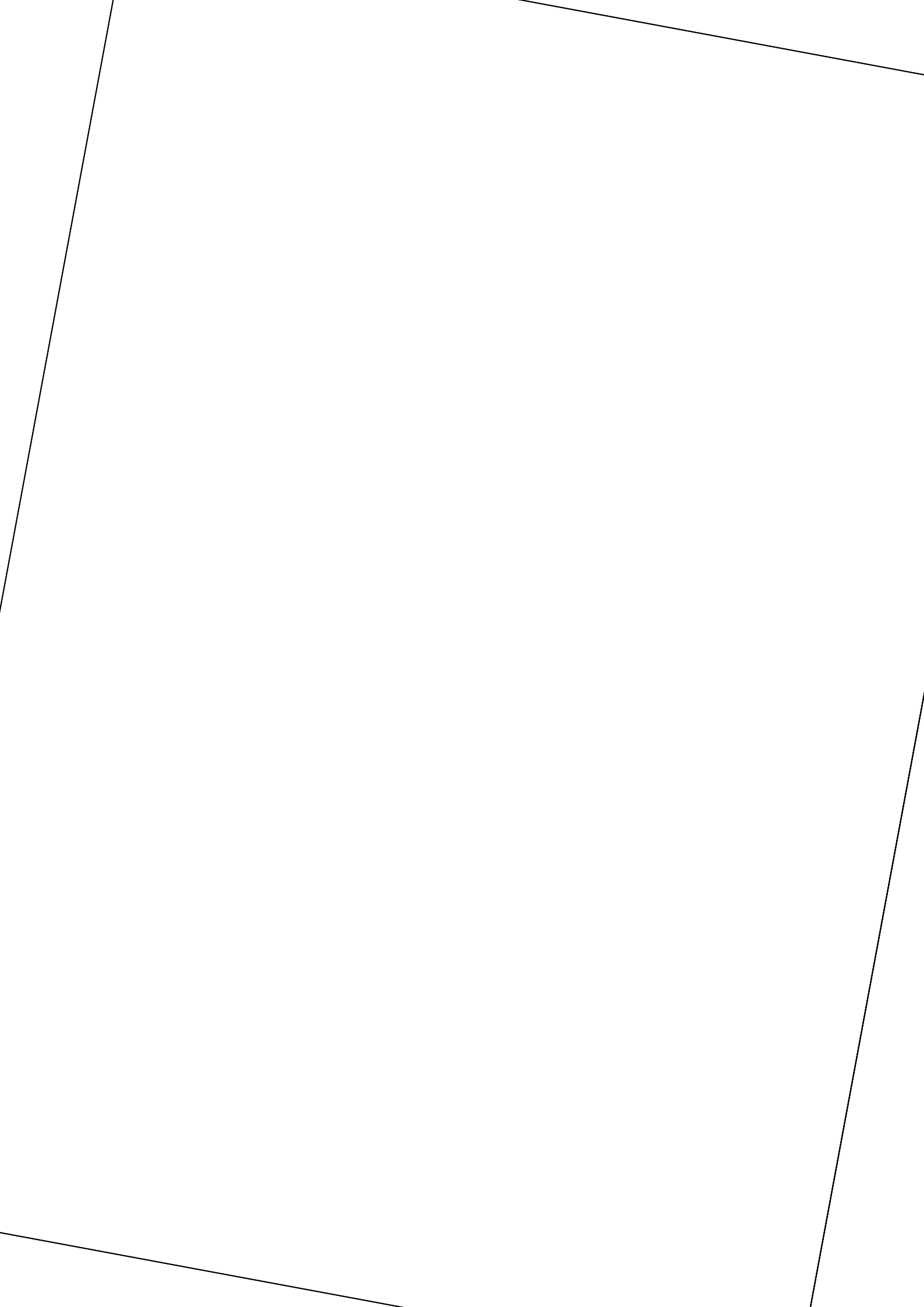


文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

文化庁 第14回 文化庁文化交流使活動報告会
文化交流使フォーラム2016秋
Japan Cultural Envoy Forum 2016 Autumn

— 日本の心を世界に伝える —
Conveying the Spirit of Japan

報 告 書



目次

文化交流使事業概要	P.4
文化庁文化交流使フォーラム 2016 秋 議事録	P.7
活動報告	
プロフィール	P.18
小野寺 修二※	P.20
畠山 直哉	P.22
藤田 六郎兵衛	P.24
矢内原 美邦	P.26
吉田 健一	P.28
文化交流使一覧	P.31

※今回のフォーラムにはご出席されていません。

文化交流使事業概要 Overview



平成 27 年度 FY2015



① 青木 涼子 Ryoko AOKI

能×現代音楽アーティスト

活動期間 平成 27 年 6 月 20 日～8 月 9 日, 9 月 17 日～11 月 1 日
活動国 アイルランド, フランス, ドイツ, デンマーク, イギリス, ハンガリー, イタリア



③ 畠山 直哉 Naoya HATAKEYAMA

写真家

活動期間 平成 27 年 9 月 2 日～平成 28 年 2 月 10 日
活動国 メキシコ, インド, フランス



② 小野寺 修二 Shuji ONODERA

コンテンポラリーダンス, マイム, 「カンパニーデラシネラ」主宰

活動期間 平成 27 年 12 月 15 日～平成 28 年 1 月 27 日
活動国 ベトナム, タイ



④ 藤田 六郎兵衛 Rokurobyoue FUJITA

能楽笛方 藤田流十一世宗家

活動期間 平成 28 年 2 月 23 日～3 月 30 日
活動国 イギリス, フランス, 韓国



文化庁では、芸術家、文化人等、文化に関わる方々を一定期間「文化交流使」に指名し、世界の人々の日本文化への理解の深化につながる活動や、外国の文化人とのネットワークの形成・強化につながる活動を展開しています。文化交流使は、諸外国に一定期間（1か月～12か月間）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーションなどを行います。

平成27年度までに、伝統音楽や舞台芸術、生活文化やポップカルチャーといった多様な分野で活躍する芸術家、文化人等、延べ122人と、26組（団体）を79か国以上へ派遣しています。平成27年度は、下記の芸術家、文化人を「文化交流使」に指名しました。

Since 2003, the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan has sent artists and other cultural figures abroad to serve as “Japan Cultural Envoys,” with a view to deepening the international community’s understanding towards Japanese culture, and to forming and strengthening networks with people around the world active in the cultural arena. The Envoys stay in one or more countries for a specified period (between one month and one year) where they conduct lectures, courses, demonstrations or other activities in their cultural fields.

By the end of fiscal year 2015, a total of 122 individuals, and 26 larger groups specializing in various fields such as traditional music, performing arts, culture and lifestyle, and pop culture has been sent to more than 79 countries. The following artists and cultural specialists were appointed as Japan Cultural Envoys in FY2015.



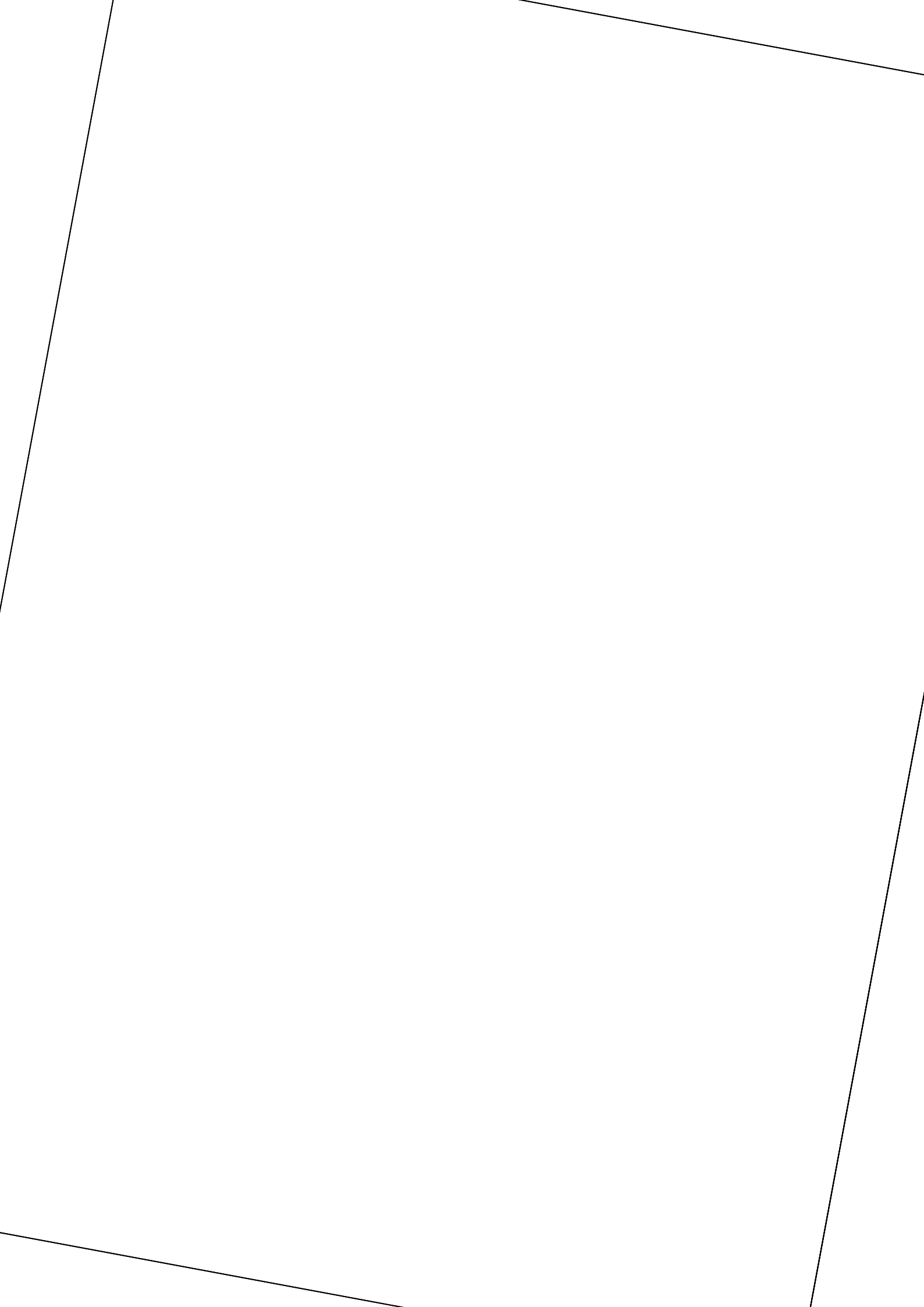
5 矢内原 美邦 Mikuni YANAIHARA
振付家、劇作家、近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授
活動期間 平成 27 年 8 月 22 日～平成 28 年 1 月 31 日
活動国 シンガポール、マレーシア、韓国、タイ、ミャンマー、ベトナム、アメリカ、インドネシア、フィリピン



7 吉田 健一 Kenichi YOSHIDA
「吉田兄弟」、津軽三味線奏者
活動期間 平成 28 年 3 月 27 日～5 月 25 日
活動国 オランダ、スペイン、イタリア、ポルトガル



6 柳原 尚之 Naoyuki YANAGIHARA
きんさしりしか
近茶流嗣家、「柳原料理教室」副主宰
活動期間 平成 27 年 7 月 29 日～9 月 20 日、9 月 28 日～11 月 8 日
活動国 ニューージーランド、ブラジル、カナダ、アメリカ



文化庁文化交流使フォーラム2016秋
議事録





吉田健一氏によるオープニングアクト（第1部）

開会挨拶

宮田亮平 文化庁長官

素晴らしいオープニングアクトでしたね。日本の受け継がれてきた文化、そして同時に世界各国から色々な時代を経て伝えられてきた文化が融合し、また新しい文化が生まれると私は思っています。この「文化交流使フォーラム2016 秋」の開催が、いかに重要であるかを吉田さんの演奏から感じる事ができました。

振り返ると400年ほど前、伊東マンショが少年使節団として、イタリア、スペインに日本の文化を持っていき、帰国の際には、印刷機などの欧州の文化を持ち帰りました。その両者が深く結ばれることによって、新しい文化ができたと感じています。同じように、今回の4名の文化交流使の皆さんは、日本の文化を世界に広げ、海外で互いの素晴らしさを共有し、帰国されたことと思います。

本日は「シノラー」こと篠原ともえさんをモデレーターに迎え、素晴らしいフォーラムになることでしょう。このフォーラムを開催するにあたり、多くの方々にご協力いただいたことに深く感謝申し上げますとともに、今後も、この事業への絶大なるご支援をお願いしたいと思います。

もう30年も前になりますが、私自身もドイツで1年間、在外研修をする機会を得ました。当初はマイスターの勉強をしようと考えていましたが、結果的には、私の専門であ

る日本の工芸美術の素晴らしさをドイツの人々に伝え、互いの素晴らしさを共有することができたことを思い出します。今後も、文化交流使の皆さんをリーダーとして日本の文化・芸術の素晴らしさを世界に広げると同時に、世界の文化を持ち込んでいただきたいと思います。



宮田文化庁長官による開会挨拶

活動報告

畠山 直哉 写真家

まず、この場を借りて、僕に素晴らしい経験をさせてくれた文化庁の方々に「ありがとう」と申し上げたい。写真は基本的に、音楽や演劇のようにその場で実演し、そこにいる人々と芸術的な時間を共有したり、楽しませたりすることができない。写真を撮影している僕を眺めても、別に楽しいわけではない。僕は、まだフィルムを使って撮影しているため、発表するまでに数カ月かかるのが普通である。

だから5カ月メキシコにいたとしても、その成果を滞在中に披露するのは難しい。そういうことを考えると、外国で写真を撮影することが果たして文化交流と呼べるのか、悩ましいところがあった。月ごとの報告書に「今月はよく風景写真の撮影をしていた」と記して文化庁へ送ると、「もっと人と交流してください」という返事が来た。できれば、僕もそうしたいところであるが、撮影は1人でおこなうものである。おそらく画家や小説家のような方が文化交流使になるときも、同じようなことを思うのではないだろうか。

2011年3月11日、東北地方で、あの信じられない出来事が起こった。僕の故郷は岩手県の陸前高田であり、そこには肉親や友人が暮らしていた。そのまちは、津波によって以前の面影を何ひとつ留めないほど、破壊され尽くしてしまった。それ以来、僕は東京から陸前高田に通い、故郷の風景の変貌を個人的な記憶と照らし合わせながら撮影を続けている。

メキシコシティでも1985年に大きな地震が起こり、1万人もの人々が犠牲となった。それから30年目にあたる2015年9月18日、災害をテーマにメキシコで開催されるシンポジウムに、スピーカーとして来てくれないかと現地の友人から誘われた。そこで、文化交流使として参加しよ



畠山直哉氏の発表

うと考え、渡航することにした。

日本の友人から、「震災以降、畠山は目を覆いたくなるようなものばかり撮ってきたのだから、これからは美しいものに触れるようにした方がよいのでは」と言われていたこともあり、僕自身、東日本大震災から少し身を離し、できるだけ遠い所へ行行って、新しいものを見てみたいと思った。

メキシコと聞くと、子どもの頃にテレビで見たメキシコオリンピックの記憶が何となくあるぐらいという僕が、昨年9月から文化交流使としてメキシコに5カ月も滞在することを決めた。震災のせいかわからないが、将来のことがうまく考えられなくなり、最初は1年ぐらい行こうかとも思っていたが、出発前に春から教職に就くことが決まったため、今年2月には帰国しようと決めた。当初決まっていたのは、出発日と帰国日だけである。大変無計画な文化交

モデレータープロフィール

篠原 ともえ タレント、アーティスト、デザイナー

1995年に16歳で歌手デビュー。タレント、女優、ナレーター、シンガー・ソングライター、デザイナーなど、枠にとらわれない幅広い活動を展開中。文化服装短期大学で本格的にデザインを学び、自身のステージ衣装はデザイン、縫製を手がける。2014年デザインアソシエーションNPO理事。同年、内閣官房CJムーブメント推進会議メンバー。2016年「第20回全国きものデザインコンクール」で京都府知事賞を受賞。





篠原氏によるインタビューに応じる畠山氏

流使であったことを、この場で白状しておきたい。

メキシコは、スペイン語ができなければ日常生活に支障をきたす国である。僕は、日本で十分な時間をかけてスペイン語を学んでおくべきだったと後悔した。他の文化交流使の皆さんは、どのように言葉の壁を越えたのか。そのコツを教わりたいと思っている。それでも、ゆっくりとしたリズムではあったが一人で生活を続け、無事に帰国することができた。

僕がしていたことは主に二つで、その一つは、大学や美術館での講演や議論。もう一つは、風景を中心とした写真撮影である。メキシコのシンポジウムでは、「なぜ災害を記録するか？」というテーマで、メキシコ大地震の報道で知られる写真家マルコ・アントニオ・クルスと対談した。

写真家は誰でも、1枚の写真をできるだけ印象的なものにしようと努力するが、そのせいで災害の様子がどこか見事な光景として人に伝わってしまう場合がある。亡くなった人々や苦しんでいる人々のことを考えると、これは見過ごせない問題である。しかし、読者に強い印象を与えようという努力を放棄してしまえば、写真は撮れなくなってしまうかもしれない。このジレンマは、道徳と美学に関わる難しい問題である。僕のその後の発表でも、主にこの点を扱うことが多かったように思う。

インドのデリー写真フェスティバルでレクチャーなどを行った後は、フランスへ向かった。パリでは文学者会議に参加したが、被災者と外部の報告者とのちょうど中間点にある僕の立ち位置のおかげで、議論はより複雑になった。さらに日本文化会館でアーティストトークを行い、またメキシコに戻った。

ユカタン半島の芸術センターでは、連続講演を行った。ここでは僕が英語で話し、通訳者がスペイン語に訳してくれた。開放的な夜の屋外でのレクチャーは、非常によい思

い出となった。モロレス州立大学では、日本国大使館の一等書記官が通訳を買って出てくれ、とてもありがたかった。

現代の視覚芸術は、新しくて難しい性質を持ち始め、単に美学的なものとしては存在できないタフなものになっている。果たして、そこに昔と同じような美学的な楽しみがあるのか。それすら定かではない。現代の視覚芸術の最前線にあるのは「議論」である。今後、視覚芸術家、文学者、人文系研究者の文化交流を考える上で、この傾向は、もう避けて通れないものという気がしている。

このたび、僕も参加している国際交流基金の巡回写真展「TOHOKU」のメキシコ展に併せて、最近の陸前高田を写した作品50点が展示されることが決定した。僕がメキシコに行ったことで、「TOHOKU」の展覧会に新たな要素が加わったのは確かだと思う。文化交流使の活動は、期間が終わってもなお、将来にわたって続いていくものだと考えている。

篠原 メキシコで仕事をするならば、メキシコ人に受け入れられるような仕事をしなければならない、といった言葉があったとのことだが、どのように受け止められたか。

畠山 メキシコでは、成功したアーティストは必ず社会にそれを還元することを考えている。メキシコだけではなく、聞くところでは南米全域でそういう傾向がある。それはたぶん、芸術というものの欲求が万人のものである一方、実際にそれができる人の数が限られていることに対しての、潤った人間たちがやらなければいけない責務だというようなことで、そういう考え方が普通にあるところは、日本と違う。

篠原 災害を伝える上で生まれる葛藤をどのように乗り越えたのか。

畠山 災害を経験した中から生まれる表現もあるし、外部から伝えようとする表現もある。しかし、その中間点にある表現は今までなかったように思い、起きてしまった出来事に巻き込まれながらも、そういう立場の表明をすることが、将来的な議論の種になるのではないかと考えている。

吉田 健一 「吉田兄弟」、津軽三味線奏者

実は、僕も言葉の問題について考え、事前にバルセロナのインターナショナルスクールに通い、戻ってから日本で個人レッスンを受けていた。そして、文化交流使の期間中もインターナショナルスクールに通いながら活動続けた。やはり現地の言葉を使うのは有効なため、今後の文化交流

使の活動では、事前準備として語学をぜひ加えていただきたいと思います。

今回、「海外における日本文化発信拠点の構築」をテーマに活動してきた。大きく分けて三つの柱があり、第一に、オランダ／アムステルフェーンでの「吉田兄弟公演」。第二に、スペイン／マドリード、バレンシアでのソロ公演である。

行く先々で、日本、そして三味線というものが認知されていることを感じたが、津軽三味線というジャンルは、まだ知られていないのが実情である。ただし、マドリードのギター職人から「津軽三味線を作ってみたい」との申し出があった。今後、スペイン生まれの津軽三味線が誕生するかもしれない。

第三は、スペイン／マドリード、イタリア／ローマ、ポルトガル／リスボン、カタルーニャエイサンプル市立音楽学校、バルセロナ日本人学校でのレクチャー&デモンストレーションである。日本文化に興味のある人を増やすことが、今後の文化発信につながる。大事なことは、浅い興味から掘り下げて、もっと知りたいという感覚をいかに芽生えさせるか。興味を持った人が見てみたい、やってみたいと思った時に、こちらが本物をプレゼンテーションすることも重要だと思う。

ESMUC カタルーニャ高等音楽院での特別授業は、今回の中心的プロジェクトであった。バルセロナには異国の文化を受け入れる風土があり、フラメンコは津軽三味線との類似点が多々あると感じている。

文化交流において必ず上がる課題は、費用と人材である。限られた時間と経費で恒久的プロジェクトにしていくには、現地で活動できる伝道師的な存在が必要となる。そこで、目を向けたのが音楽大学であった。

最後の発表会の後、受講生たちは「津軽三味線を続けたい」と言ってくれた。僕自身がそこで存在しなくとも、彼ら自身が一つの発信拠点として日本文化を広める役割を果たし、日本に興味のある人々が増えていくことにつながっている。

課題として、文化交流使の活動は最長でも1年であるが、大事なのはその後だと思う。短期の活動であっても、それを2年、5年、10年と続けることで理解が得られ、その土地に根付き、単発ではない発展の文化交流ができるのではないか。

もう一つの課題は引き継ぎである。大使館や領事館の担当者が変わっても、課題や将来的な展望などは、公的な財産として後任者に引き継がれるべきだと考えている。民謡の世界も変革の時を迎えている。日本のために、互いに何が必要かを見極め協力することで、新たな道が必ず開けて

いくものと確信している。

今後は、ESMUCでのレクチャーを定期的なものとし、海外音楽大学で津軽三味線奏者を育成するプロジェクトにしていきたいと考えている。既に先月、再びバルセロナを訪れ、担当の先生方と今後の進め方についてミーティングを行い、フランス／パリでのレクチャー&デモンストレーションを開催した。

来春予定している吉田兄弟の欧州公演では、音楽大学の生徒たちとの共演を実現していきたいと思っている。日本では残念ながら、津軽三味線を学べる大学は存在しない。しかし、国内では15年ほど前からブームが起り、大会の数も増加している。早稲田大学の津軽三味線サークル「みつどもえ」は、在籍者数がまもなく100人を超える勢いである。

津軽三味線は、民謡の枠を大きく超え、1つのジャンルとして世界で認知され始めている。僕が考えるこのプロジェクトは、単に文化を伝えるということではなく、世界で活躍する外国人奏者を増やし、国や地域での日本文化の発信を入口として日本に足を運んでもらい、本当の日本を肌で感じてもらうというものである。津軽三味線は、世界をつなぐ架け橋になり得るものと考えている。今後はバルセロナだけでなく、欧州各国や米国など世界各地に広がるプロジェクトに成長する可能性があると感じている。



吉田健一氏の発表



篠原氏によるインタビューに応じる吉田氏

篠原 海外の人々の津軽三味線の反応はどうか。

吉田 三味線の「ちんとんしゃん」のイメージに対し、バチで胴の部分を叩く津軽三味線は、弦楽器でありながら打楽器に近い。そのため、まず音のボリュームの大きさに驚かれる。また、音のバリエーションの豊かさから「3弦のように聞こえない」とよく言われる。

篠原 映像では、スペインの学生たちが思ったより弾けていて驚いた。

吉田 僕も正直驚いた。もともと弦楽器をやっている学生ということで、弦を押さえる左手はスムーズに覚えていたが、バチを持つ右手は難しかったようだ。しかし、8回の授業であそこまで弾けるようになるとは、生徒にも恵まれたと思う。

藤田 六郎兵衛 能楽笛方 藤田流十一世宗家

能の公演で海外へ行くことは多いが、笛一人で海外へ行くことは、これまであり得なかったことである。私は、5歳から笛の世界でプロとして活動してきた。今、聞いていただいたこの笛は450年前のもので、初代家元から11代目の私までずっと引き継がれてきた。

私は文化交流使として、ロンドン2週間、パリ2週間、韓国8日間と回った。ロンドンでは、音楽大学のフルート科の学生やオーケストラの管楽器の人たちに教える予定であった。驚いたことに、ロンドン大学には能楽堂がある。そこで能について語り、演奏をした。能の笛は、フルートのようにドレミファソラシドの音が出ない。息を混ぜるのが能の笛の特徴である。

パリでは、14日間で8回の活動を行った。パリ第8大学へ行くと、100人以上の学生が待ち構えていた。しかし、

笛は7本しかない。そこで日本の自然に対する畏怖心などについて、講演を行った。日本の芸能における一番の思いは、神への祈りである。天下泰平、五穀豊穡、国土安穩という人々の願いが、芸能につながっている。

また、音のない「間」の部分が大事である。その音のないところを聞かせるために、前後に強い音がある。音のないところには、あらゆるものが収まっている。無音だからできる、そういう音を能の世界では大切にしている。『星の王子さま』にも、「大切なものは目には見えない」という言葉が登場するとおりである。講演では、このような話をした。

一番の思い出は、IDEMというリトグラフの工房での演奏である。ピカソ、シャガールのリトグラフを刷っていた工房で、150年前の機械が今でも動いている。大理石の石版が本棚のようにずらっと並んでいる。「さあ、どこで演奏しましょうか」と言うと、リトグラフを刷る鉄の塊の上でいいという。そんな大切なものの上に乗っていいものかと案じていると、職人たちは「自分たちが大切にしているものだから、この上でやってほしい」と言ってくれた。

そして演奏前に、機械の音を私に聞いてほしいという。以前、別の音楽家に聞かせたところ「メトロノームのように規則正しい音がする」と言ったようであるが、私は違った。その重いズンとした響きは、人間が初めて聞く母親の心臓



藤田六郎兵衛氏の発表



藤田六郎兵衛氏によるオープニングアクト（第2部）

の音のように聞こえた。この機械とのコラボレーションは、私にとって素晴らしい思い出となった。今でも、その鉄の塊の音を覚えている。

パリでは、音大のフルート学科からオファーを受けていた。そこでの講義中、日本人現代作曲家の曲で、楽譜に「能の笛のような音を出す」というような指示が書いてあるため、「私が吹いているのは正しいノイズなのか、間違ったノイズなのか」という質問が寄せられた。能には「もっと息の音を混ぜよ」といった指示はないため、その質問は目から鱗であった。そこで私は、「あなたの美意識が高まれば、正しいノイズが出ます」と答えた。また、小学校1年生から中学校3年生まで160人が待つ日本人学校へも行った。

韓国では、自国の民族音楽だけを演奏するコンサートホールを訪れた。はじめは、どうして日本の楽器をここでやるのかという雰囲気であったが、「この横笛は、中国大陸から朝鮮半島を渡って日本へ伝わり、この能の笛になった。今、韓国に来て、まさしくその道を感じる。そのもとに、私は今いる。本当に幸せなことだ」というと、非常に好意的に演奏させてくれた。そして最後には、アリランを演奏した。

私にとって、これまで当たり前に使っていた息、風を切る音は、欧州の曲にはない。能の笛は、演奏中に虫の声や雨の音がしても、それをすべて味方にして、もっと深い世界を表すことができる。その魅力や秘密に、世界の作曲家たちが注目している。このように、お互いの理解を深めて

いくことが文化の交流となり、人々の優しい心、温かい心、柔らかい心の交流につながるのだと思う。私にとって得るものの多い37日間であった。

篠原 活動中、身の回りのことは自分でされたのか。

藤田 文化交流使は全部自分でやらなくてはいけない。キッチン付きの部屋に泊まり、基本的に自炊だった。ホテルも自分で調べた。とても勉強になった。

篠原 配布資料に書かれている光州事件記念公園での衝撃的な体験について、うかがいたい。

藤田 光州事件の慰霊塔前で演奏したところ、敷物に座るまで、そして演奏後の映像はきれいに残っていた。しかし、演奏中の部分だけ、映像には光が舞い、音声は風のような音にかき消されていた。現実の鎮魂として、能の笛には何かがあるのだと感じた経験であった。

矢内原 美邦

振付家、劇作家、近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授

私は、20歳からずっとコンテンポラリーダンスを続け、Nibroll（ニブロール）というダンスカンパニーを立ち上げた。そして20代後半から30代に入るまで、欧州と米国を中心にツアーをしてきた。振付家であり、演出家である私が、



矢内原美邦氏の発表

文化交流使という名で東南アジアを中心に7カ国を回ることになった。もともとと呼ばれていたシンガポールインターナショナルアートフェスティバルで公演を行い、アーカイブプロジェクトにも取り組んだ。

はじめの2カ月間は、シンガポールとマレーシアを歩き来しながら活動し、マレーシアのダンスフェスティバルでは、現地のダンサーに振付をした。サンウェイ大学で講義も行ったが、英語圏だったため言語には困らなかった。ここで、マレーシアはマレー優遇制度がとられているため、中国系マレーシア人は大学に入りにくい状況があることを知ったが、このサンウェイ大学は、数年前に中国系マレーシア人に開放された大学ということであった。

その後、タイバンコクシアターフェスティバルへ行くことが決まり、国際交流基金の方に助けていただきながら、すぐオーディションを始めた。フェスティバルでは、2011年に制作した『戦略的な孤独』を上演した。シェイクスピアシリーズとしてジュリアス・シーザーをモチーフにした作品であるが、有名なセリフ「ブルータスお前もか」の「も」にひかれて書いた戯曲である。

この「も」の中には、人間同士の裏切り、コミュニケーションから生じる孤独や阻害、そして永遠的な連鎖が込められているように感じる。この連鎖は、今の世の中にも生き続けている。そこから逃れるための手段の一つとして、「孤独」になることが挙げられる。そんな孤独のあり方は、ここ数年で大きく変わってきているように思う。自分の身を守るために戦略的に孤独を身にまとう永久的な連鎖から逃れるために、何を選択するか。私たちは、常にその選択に迫られていることをここ最近、感じている。

シーザーが言った「も」には絶望の念が込められているが、

私はどうにか迷いながらも、言葉と身体をつながりの中で、希望の中に「も」を見つけ出したいと思いながら、この戯曲に取り組んだ。そして、それをタイで上演する意義は大きいと考えたが、構成を変えて翻訳するのに1カ月、稽古に1カ月を要した。

インドネシアとベトナムでは、無料で公演を行った。これらの国は、検閲の問題で、お金をもらって公演するのが難しい。透ける素材の衣装は使えず、構成も多少変えながら、どうにか上演にたどり着くことができた。

フィリピンのマニラでは、主にレジデンスを中心に活動した。私は、どこかの国へ行って自分が圧倒的に変わるとは思えず、窓から社会を見ることを目的に映像作品を作った。ベトナムのホーチミンでは、おもにグラフィックを制作した。

私は、ダンスと演劇という二つの分野に美術も少し絡めながら、あちこちウロウロしながら作品を作っており、その両方の分野からつながりを探っていきたいと思っている。現在、亜女会（アジョカイ／アジア女性舞台芸術会議）というものをやっている。アジアのコンテンポラリーダンスやシアターカンパニーは、欧州に比べて非常に厳しい状況に置かれているが、そんな過酷な環境の中でも、やりくりしながら活動を続けている東南アジアのダンスカンパニーやシアターカンパニーには、希望を感じた。彼らの作品を見て、その思いを共有し、日本の多くの人々に紹介していきたいと思っている。



ここ数年、アジアの国々へ行く機会が増え、貴重な素晴らしい経験を得ることができた。アジアにはたくさんの国があるが、それぞれの生活レベルは異なり、価値観も違う。言語、宗教、民族、すべて違う。私は、その国によって何が違うかを感じながら活動していきたいという思いを自分のスタートとして、文化交流使の活動に取り組んできた。私たちは、出会って話をして、これからアジアという地域にある自分たちの国でどのように活動していくかをもっと深く考えていく必要がある。この活動を通して、そう思った。

篠原 海外では、「どうして君はここへ来たの？」というストレートな質問を受けるということだが、どのように感じたか。

矢内原 演劇は不自由。私たちは、常に客人として外国で公演をしていたが、現地の役者たちからは「なぜ日本の演出家なのに、ここで演劇をやるの？」と率直に聞かれる。その答えは、すぐに返せなかった。

篠原 検閲があると聞いて驚いた。

矢内原 マレーシアやインドネシアでは、たとえば女性の肌が見えるような公演はできないため、黒いタイツを履くことがある。使ってはいけない言葉も指摘される。

トークセッション

篠原 宮田長官は、かつてドイツで活動されていた際、言葉の壁をどう乗り越えられたのか。

宮田長官 死ぬほど勉強した。インターネットもない時代で、ウォークマンを使って四六時中聞いていた。あとはドイツ人の友達を探し、自ら飢餓状態をつくった。

畠山 僕の場合は、英語ができるメキシコ在住の若い人を雇って撮影に行ったり、まちを案内してもらったり、アパートを見つける手伝いをしてもらった。

吉田 現地では、昼間は大学で教え、夜は生徒になるという繰り返し。頭の切り替えが大変だった。僕は、事前準備で楽器のことを調べて行ったが、そういう無駄な時間を減らす工夫が課題になると思う。

藤田 ロンドン、パリ、韓国だったため、片言の英語で済んだ。パリでの公演では通訳者を頼み、韓国では日本文学の専門家たちが通訳だったため助かった。

矢内原 演出の際、タイの役者に「なぜ、こんな簡単なことができないのだ」と英語で言っていたら、「“easy”という言葉を使わないで」と言われた。文化の違いがあり、東南アジアでは、どこの国でも人前で叱るのはよくないという

ことであった。そこで、こっそり呼び出して注意するようになった。

篠原 皆さんがおっしゃるような語学学習のサポートは、今後、文化庁で考えていらっしゃるのか。

宮田長官 技術的なことは、師匠の背中を見て覚えることができる。しかし、感性の部分では言葉が必要になってくる。完璧である必要はないが、ある程度の語学力はあったほうがいい。

篠原 では、前向きにご検討いただくということで。本日、それぞれのご報告を聞いた感想をうかがっていききたい。

畠山 自身、他の分野の方々の活動には疎いものと反省していたところである。それぞれの仕事なりに難しさがあり、同じ芸術家だからといって分かるとは限らない。微妙なところで皆さんが多くのエネルギーを使っていることを知り、今日は来てよかったと思う。

吉田 他の国の映像を見ると、そこへ行きたいという気持ちが強くなる。現地の方にとって、一生に一度しかないかもしれない日本文化と触れ合う機会を大事にしていきたい。

藤田 皆さんの各国に対する思いを知ることができた。事前に互いの情報を知り、より深い交流ができればいいと思った。

矢内原 音楽やダンスといった無形の文化を、どうやって新しいものに変えていくかということを皆さんがよく考えていて、昔のままではなく、その人の身体を通して今の時代に生きて返ってくることを感じた。

篠原 皆さんが海外を意識するようになった、きっかけは何か。

畠山 写真が生まれたのは欧州である。そのため、学生時代の頃から目は欧州を見ていた。当時はメキシコのことは



宮田文化庁長官、篠原氏、交流使4名によるトークセッション



トークセッションの様子

あまり見ていなかった。

吉田 5歳から三味線を習い始め、中学生の時に初めて海外で演奏したのは、シドニーのオペラハウスだった。その時に、飽きて帰ってしまうお客さんがいるのを見て、わかりやすく変化させることが必要と感じ、その影響でオリジナル曲を作るようになった。伝承すべきものを生かしつつ、現代に生きるクリエイターとして皆さんにどう見せるかが、自分たちの役割だと考えている。

藤田 日本の音や間は、子どもの頃からの感覚として身に付いている。それが、西洋の音とどう溶け合っていくのか。笛一人で海外へ出ることで、自分の中にどのような言葉が生まれるのか。自分自身、楽しみであった。

矢内原 幼い頃から、海外は割と身近だった。ダンスは、アメリカンポストモダンから始め、コンテンポラリーダンスで最初に受賞したのはフランス。20代前半から30代前半にかけては、ツアーで海外を回っていた。

宮田長官 芸術は世界中同じだが、日本では当たり前の技術でも、海外で披露すると魔法のように驚かれるのが面白く、とにかく海外へ行きたがっていた時期があった。

篠原 畠山さんは、日本らしさをどのように取り入れているのか。

畠山 僕の上の世代の人たちの素晴らしい仕事が欧米で評価され、最近、ジャパニーズフォトグラフィーという言葉が頻繁に使われるようになった。僕は、彼らの仕事を見ながら自己形成してきたため、国のことを考えるよりも、いきなりユニバーサルな議論の中に入っていこうとしていた。

一方で、海外で写真を発表すると、東京で撮った写真のほうが関心を持って見てもらえることがわかった。海外で撮った僕の写真が「日本的だね」と言われることもあるが、その理由はよくわからない。無意識、深層心理なのかもしれない。

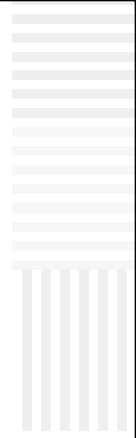
篠原 日本のパワー、伝統芸能というものを、どのように伝えるよう心掛けておられるか。

吉田 三味線を通し、海外で日本の技術に気づかされることが多い。海外で気づいたからこそ、演奏以外で伝えたいことも増えてきて、文化交流使の意味を強く感じているところである。

藤田 伝統という言葉は難しく、昨日と同じだから正しいというわけではないし、正しい芸能と言っても何の意味もない。今日見る人にとって楽しいか、美しいかである。どんな伝統も時代で必ず変わってしまうため、「変わるのであれば、こう変えたい」という覚悟を持たなければならない。それが本来の伝統である。世界のどこへ行っても同じだと思う。

宮田長官 それぞれの違いを感じる中で、自分がどこにいるべきか、わかるようになる。

矢内原 これまで日本人として、海外で多少なりとも差別を受けてきたと思う。しかし、日本人であるという事実はいえられない。人種にかかわらず、アーティストは共同体の中で何ができるのか。それをシェアしていきたい。ノーマルに存在していくことの中に、何かがあるのではないかと考えている。



活動報告

プロフィール Profile



(石川 純 / JUN ISHIKAWA)

小野寺 修二

コンテンポラリーダンス, マイム,
「カンパニーデラシネラ」主宰

演出家。日本マイム研究所にてマイムを学ぶ。2006年には文化庁新進芸術家海外留学制度の研修員としてフランスに一年間滞在。その後、「カンパニーデラシネラ」を立ち上げる。作品はマイムの動きをベースに台詞（せりふ）を取り入れた独自の演出で、世代を超えた観客層の注目を集めている。近年は音楽劇や演劇などで、振り付けの担当もしている。

Shuji Onodera

Mime, Contemporary Dance /
Leader of Company Derashinera

Producer and Director. Learned Mime at the Japanese Mime Studio. In 2006, he stayed in France for a year as a trainee of rising artists, encouraged by the Agency for Cultural Affairs' exchange program. Later, he established the "Company Derashinera". He uses lines (words) on Mime performances, which is very unique way of producing Mime performance, and has been paid attention from various generations of audience. Nowadays he also choreographs for musicals and dramas.



畠山 直哉

写真家

1958年岩手県陸前高田市生まれ。筑波大学にて戦後前衛芸術集団「実験工房」のメンバーであった大辻清司や山口勝弘に薫陶を受ける。同大学院芸術研究科修士課程修了後、東京を拠点にし、自然・都市・写真のかかわり合いに主眼をおいた一連の作品を制作する。石灰石鉱山の連作と、東京の建築空間や水路を被写体にした作品群で注目を集め、1997年第22回木村伊兵衛写真賞、2001年第42回毎日芸術賞、2012年芸術選奨文部科学大臣賞などを受賞。2012年ヴェニス・ビエンナーレ国際建築展の日本館展示（金獅子賞を受賞）など、国内外で個展、グループ展に多数参加。作品はTATE（ロンドン）、MoMA（ニューヨーク）、東京国立近代美術館をはじめとする、主要都市の美術館に収蔵されている。

Naoya Hatakeyama

Photographer

Born in Rikuzentakata City, Iwate Prefecture in 1958. He studied photography at the University of Tsukuba, learning deeply from Kiyoji Otsuji and Katsuhiko Yamaguchi, who belonged to Japan's post-World War II group of avant-garde artists "Jikken Kobo" (meaning, experimental workshop). After completing the Master's Program in Art and Design at the Graduate School of Comprehensive Human Sciences, he moved to Tokyo and produced a series of works focusing upon the relationship amongst nature, the city and photography. He attracted public attention with a series of photos of limestone mines as well as a body of works that brought into focus the architectural space and underground waterways of megalopolis Tokyo. Won the 22nd Kimura Ihei Award in 1997, the 42nd Mainichi Culture Award in 2001, the Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology Award for Fine Arts in 2012, etc. He participated in a variety of solo and group exhibitions and shows, including the Japan Pavilion that was awarded the Golden Lion for Best National Participation at the 13th International Architecture Exhibition, the Venice Biennale in 2012. His works are in public collections at museums in major cities in Japan and overseas including TATE in London, MoMA in New York and the National Museum of Modern Art in Tokyo.



藤田 六郎兵衛

能楽笛方 藤田流十一世宗家

1953年、十世宗家の孫として名古屋市に生まれ、藤田家芸嗣子となる。4歳にて笛の稽古を始め、5歳にて初舞台。15歳までに、能の主要曲である『鶯乱』『狸々乱』『望月』『石橋』『翁』『道成寺』を異例の若さにて披露。1980年、藤田流十一世宗家となり1982年家名「六郎兵衛」を襲名。重要無形文化財（能楽）総合指定保持者。西洋音楽にも精通し、大学では声楽を専攻。自身の能の世界観を伝えるために観能の会「萬歳楽座」を主催する。

Rokurobyou Fujita

Noh Flute Player / 11th Generation Master, Fujita School of Noh Flute

Born in 1953 in Nagoya City, Aichi Prefecture, as a grandson of the 10th Generation Master of the Fujita School of Noh Flute and designated as the heir to the Fujita School. He started training at 4 years old as a traditional flute player and made a debut at 5. By the age of 15, an exceptionally young age in the Noh world, he played an array of highly delicate music pieces as well as grand scale ones. In 1980, he became the 11th Generation Master of the Fujita School and in 1982, succeeded to the family's traditional name of Rokurobyou. He was appointed as an Important Intangible Cultural Property in "Nohgaku." He majored in vocal music at college and is well-acquainted with Western music. To convey his perspective on the world of Noh, he chairs a Noh viewing club Manzairaku-za.



矢内原 美邦

振付家、劇作家、近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授

ニブロール主宰。日常的な身振りをベースに現代をドライに提示する独自の振付で国内世界各地のフェスティバルなどにも招聘される。劇作・演出も手がけ、2012年岸田國土戯曲賞を受賞。off-Nibroll 名義で美術作品の制作も行い、上海ビエンナーレ、大原美術館、森美術館などの展覧会に参加。『ホッタラケの島』や『ピンクとグレー』などの映画でも振付担当、ダンスと演劇、美術などの領域を行き交いながら作品制作を行う。2001年ランコントレ・コレオグラフィック・アンテルナショナル・ドゥ・セーヌ・サン・ドニ・ナショナル協議員賞、2007年に第1回日本ダンスフォーラム大賞受賞、2012年に横浜市文化芸術奨励賞を受賞。近畿大学舞台芸術学科准教授。

Mikuni Yanaiharu

Choreographer, Director, Play Writer / Associate Professor of Performing Arts Course, Kindai University

Leads Nibroll, a dance company, and invited to a variety of festivals in many parts of the world for her unique choreography based on everyday movements to express the contemporary era as it is. Also engaged in writing plays and directing dramas, wins the 56th Kunio Kishida's Play Award in 2012. Creates art works under the name of off-Nibroll and takes part in exhibitions at the Shanghai Biennale, Ohara Museum of Art, Mori Art Museum, etc. Takes charge of the choreography for films such as Oblivion Island and Pink and Gray. Her creative works go beyond the genre of dance, theater, art or others. Wins the "National Conference Award" at Rencontres Chorégraphiques Internationales de Seine-Saint-Denis Yokohama Platform in 2001, the "Excellence Award" at the first Japanese Dance Forum Award in 2007 and the "Yokohama City Cultural Art Encouragement Award" in 2012. Serves as an associate professor at Kindai University in the Performing Arts Course.



吉田 健一

「吉田兄弟」、津軽三味線奏者

5歳より三味線を始める。津軽三味線の全国大会で数々の賞を受賞し、兄の吉田良一郎と共に「吉田兄弟」として1999年メジャーデビュー。邦楽界では異例のヒットを記録し、現在まで13枚のアルバムなどを発表。2003年の全米デビュー以降世界各国での公演や、様々なアーティストとのコラボレーション、舞台音楽・CM音楽なども多々手掛けている。またソロアーティストとして、若手トップクラスの奏者が集結した「津軽三味線集団 疾風」のプロデュースや、単独公演を成功させるなど、その活動は幅を広げ続けている。

Kenichi Yoshida

"Yoshida Brothers", Tsugaru Shamisen Player

Began to learn shamisen, Japan's traditional three-string musical instrument, at the age of five. After winning a number of awards at national Tsugaru shamisen contests, made a major debut in 1999 as "Yoshida Brothers" together with his elder brother Ryoichiro. Since his 2003 debut in the United States, has been in collaboration with various artists to create works and deliver music for theater as well as commercials. As a solo artist, also continues to expand the range of his activities that include the launch of a Tsugaru shamisen company Hayate (meaning Fresh Gale) by uniting young, top-class players and a successful concert by the company alone. Released so far a total of 13 albums and others that include hits exceptional for Japanese traditional music.



(石川純 / JUN ISHIKAWA)

小野寺 修二

コンテンポラリーダンス、マイム、「カンパニーデラシネラ」主宰

活動期間 平成 27 年 12 月 15 日～平成 28 年 1 月 27 日

活動国 ベトナム、タイ

Shuji Onodera

Mime, Contemporary Dance / Leader of Company Derashinera

Period of the activities: From December 15, 2015 to January 27, 2016

Countries visited: Vietnam and Thailand

ベトナムとタイに滞在して



ハノイ映画演劇大学舞踊コース学生ワークショップ。2015/12/22

Student Workshop with the Choreography Course at Hanoi University of Drama and Cinematography (December 22, 2015)

2016 年冬、文化庁文化交流使としてベトナムとタイに滞在させて頂いた。これまでも演出作品の海外公演機会はあったのだが、アジアに赴くことは少なく、前団体での 2013 年タイ公演以来のアジア国訪問となった。最初お話を頂いた時は、アジアの国々の違いも明瞭ではなく、予備知識の少ない中でのスタートだったが、帰国した今となっては良い時期に、良い経験をさせて頂いたと思っている。

まず渡航準備段階で、現地でのワークショップ開催希望を出すのだが、そのことに対するイメージはあまり湧いていなかった。誰が、何を求めて、と半信半疑だったのだが、実際は多くの方に集まって頂き、そのことに驚いた。日本語を勉強中の若者にも多く会った。普段日本国内にいて、自身は学ぶ姿勢をこのように持ち続けているだろうか、内向きに発信を続けているのではないだろうか、そんなことを思った。

20 年以上舞台活動が続けてきたものの「日本固有の芸術」に特化しているわけではない自身の活動が、日本派遣、文化交流使の任を得て、どのように受入れられるか未知数であった。しかし、伝統とも普遍的ジャンルとも違う「自由な」表現として、新鮮さでもって受入れられたように思う。ベトナム、タイ両国共に、「知らず知らずの間に（自分達は）

伝統に縛られていたと気付いた」と口にするアーティストが多く、日本文化の寛容性、ある種特徴を見た気がした。

また自らの思惑とは違って「日本らしさを感じた」という感想も多く、日本に対するイメージを掴むと共に、好意的に受け止められている土壌を感じた。伝統に縛られ過ぎていない、自由な風通し、丁寧さといった面の高評価を多く耳にした。

また、マイムの表現は「見立て」を軸にしている、そういったものの見方や考え方の提示は、新鮮にうつるようだ。自身の活動を思わぬ角度から励ましてもらった気がしている。

アジア的な開放感を強みに、ヨーロッパ文化に寄り添い過ぎるのではなく、混沌の魅力、本来持っていた枠組みに囚われないものの捉え方で、アジア独自の文脈を掘り起こしたい、そんなことを思った。



タイ公演ポスター

Poster of a performance in Thailand



バンコクワークショップ（フリーランス）。2016/1/17
Workshop in Bangkok (Freelance) (January 17, 2016)



ハノイ、青年劇場。2015/12/21
Youth Theater in Hanoi (December 21, 2015)

Recollecting my stay in Vietnam and Thailand

I was pleased to have been given the chance to stay in Vietnam and Thailand in the winter of 2016 as a Japan Cultural Envoy of the Agency for Cultural Affairs. I have had many opportunities to perform my choreography abroad, but few in Asia, so this was my first visit to Asian countries since my previous company's staging of performances in Thailand in 2013. When I was first offered this opportunity, I was not clearly aware of the differences among Asian countries and started off with little background knowledge. Now looking back after returning home, I very much appreciate this great and timely experience.

In the beginning, when I was preparing for the trip, I had to submit a request to hold workshops in the relevant countries, but I couldn't imagine well how that would go. I was half in doubt -- Who would come? What would they expect? As it turned out, however, many people participated and it took me by surprise. I also met many young people who were studying Japanese. I asked myself if I had ever maintained such an eagerness to learn in Japan and thought that maybe I continued to express an inward performance.

Although I had been engaged in performing on stage for more than 20 years, when I was appointed a Japan Cultural Envoy to be dispatched from Japan, I could not tell how my activities, which are not specialized as Japan's indigenous art, would be accepted. However, I think my activities were accepted as one of the free expressions for novelty, rather than one of tradition or of belonging to a universal genre. Both in Vietnam and Thailand, many artists said they found having been bound by tradition without realizing it. Listening to them, I was able to see tolerance, one of the characteristics of Japanese

culture.

Despite my intention, there was also a lot of feedback such as they realized a sense of Japan, which allowed me not only to grasp the image they had of Japan, but also to feel the grounds on which people favorably received my activities. I heard many good reports such as the performances were not much bound by tradition, they were free and conscientious.

Moreover, mime expressions sit on the axis of Mitate, likening one thing to another, and presentations of such views and notions appear novel. I feel my activities were encouraged from an unexpected angle.

It also instilled in me a desire to delve into Asia's unique context, with its charm of chaos, not overly ingratiating myself with European culture, but rather appreciating the original philosophy that is not obsessed with frameworks, and taking advantage of the Asian sense of openness.



ベトナム公演ポスター
Poster of a performance in Vietnam



畠山 直哉

写真家

活動期間 平成 27 年 9 月 2 日～平成 28 年 2 月 10 日

活動国 メキシコ、インド、フランス

Naoya Hatakeyama

Photographer

Period of the activities: From September 2, 2015 to February 10, 2016

Countries visited: Mexico, India and France

メキシコ、インド、フランス訪問



オアハカ、マニエル・アルヴァレス・ブラヴォ写真センター。2015/10/23
Manuel Álvarez Bravo Photographic Center in Oaxaca (October 23, 2015)

私は 2015 年 9 月から 5 ヶ月間、メキシコに滞在した。十年以上も前から、メキシコシティに住む知り合いは「ぜひ来て下さい」と誘ってくれていたが、機会には恵まれず、また自分がそこでどんな活動ができるのかも想像できなかった。しかし、文化庁との話し合いが本格化した今年の春頃、その知り合いから「9 月にメキシコ大地震 30 周年のシンポジウムを計画しており、その発言者として呼びたいが、旅費の工面に難儀している」と聞き、ならば「文化交流使」の活動としてそれに参加してはと思い、メキシコ行きを決めたのだった。

私は 2011 年 3 月に起きた東日本大震災で、実家や肉親を失うという目に遭っており、以来複雑な思いと共に、故郷の陸前高田の風景を現在まで撮影してきた。災害は世界の至る所で起きる可能性があるもので、メキシコでも 1985 年 9 月に起きた大地震では、建物の倒壊などによって、首都に暮らす 1 万人もの人々がその犠牲になった。災害は報道で伝える以外に、個人レベルの言葉で伝えることで、深い議論を生み出す。その意味で、私の経験や考えをメキシコの人々と共有することも、「文化交流」と呼べるのではないか、と思うに至った。

2015 年 9 月頭にメキシコに到着して以降、首都にあるメ

キシコ国立芸術センターにおいて、メキシコ大地震の報道で知られる写真家のマルコ・アントニオ・クルスとの対談をおこなったのを手始めに、10 月にはオアハカの写真センター、国際交流基金デリー事務所の招きによりインドに飛びデリー写真フェスティバル、そこからフランスに向かい、11 月にはバリの文学者会議、帰国後にメキシコ自治大学美学科、2016 年 1 月にはユカタン半島のカンペチェおよびメリダの芸術センター、クエルナヴァカのマレロス州立大学、2 月にはモンテレイ大学およびモンテレイ現代美術館などで、自分の作品や考えなどを、大震災以前と以降に分けて紹介し、可能な場合には聴衆と話し合いをおこなった。

講演の合間には、主にメキシコ・シティ周辺で風景写真の撮影をおこなった。慣れない土地で言葉（スペイン語）に不自由していたため、英語ができ運転をしてくれるアシスタントを現地で雇った。写真は、音楽や舞台芸術などと異なり実演性を伴わないので、「交流」は即時的には生まれない。撮影成果の一部を最近、東京の資生堂ギャラリーで披露することができたが、全体をまとめるにはもう少し時間が必要であり、その意味で私の「文化交流」の後半は、これからだと思っている。



グアナファトでの撮影。2015/12/24
Photoshoot in Guanajuato (December 24, 2015)

Visit to Mexico, India, and France

I stayed in Mexico for 5 months from September 2015. An invitation had been extended to me, more than 10 years before, from an acquaintance of mine in Mexico City. “Please come to Mexico.” Yet I could never find the right time. Nor could I imagine what types of activities I could do there. In spring of the same year, however, the same acquaintance told me, “We are planning to hold a symposium in September to mark the 30th anniversary of the Mexico Earthquake 1985. We would like to invite you as a guest speaker, but we are in trouble financially.” It was just around that time that a plan began to gather momentum to dispatch me overseas as one of the Japan Cultural Envoys under the Agency for Cultural Affairs. Why shouldn’t I attend the symposium in Mexico as part of the Envoy’s activities? I made up my mind to visit Mexico.

The Great East Japan Earthquake in March 2011 reminds me of losing my family member and destroying my parents’ home. Since then, I have been taking photos of my hometown, Rikuzentakata, Iwate Prefecture with mixed feelings. Disasters will occur anywhere in the world. In Mexico, too. The great earthquake occurred in September 1985 and a lot of people passed away by the earthquake. I believe disasters deepen our discussion when we convey what we have witnessed in our own personal words in addition to media reports on them. In this context, I came to conclude that sharing my own experience and thoughts with people in Mexico would be a case of “cultural exchange.”

I arrived in Mexico early in September 2015. First of all, I joined a dialogue with Marco Antonio Cruz, a well-known photographer of the Mexico Earthquake in 1985, at the



モンテレイ現代美術館。2016/2/4
Museum of Contemporary Art, Monterrey (February 4, 2016)

National Museum of Mexican Art in the capital city. In the following month, after having a meeting at the Photography Center in Oaxaca, I visited India at the invitation of the Japan Foundation, New Delhi to take part in the Delhi Photo Festival. In November, I extended my trip to France to attend a literature conference in Paris. Then I returned to Mexico and carried on my activity there to present my works and thoughts, respectively for the pre- and post-March 2011 earthquake days. I started it with the National Autonomous University of Mexico’s Faculty of Arts and Design. I visited and gave lectures at art centers in Campeche, Mérida in the Yucatan Peninsula and the State University of Morelos in Cuernavaca in January 2016, and the University of Monterrey and the Museum of Contemporary Art, Monterrey in February. When time permitted on these occasions, I had discussion sessions with the audience.

During my lectures, I took photos of landscapes mainly in around Mexico City. I was not familiar with this country and not be able to speak Spanish, so I hired an assistant who could speak English and drive a car for me. Photography does not accompany live performance like music, theatrical art and the like. Therefore, it does not produce instantaneous “exchange.” Recently I had an opportunity to present some of my photography achievement at the Shiseido Gallery in downtown Tokyo. However, I need a little more time to put my achievements together into a total, organized picture. In that sense, I think the latter part of my “cultural exchange” will start from this point forward.



クエルナヴァカ、モレロス州立大学。2016/1/27
State University of Morelos in Cuernavaca (January 27, 2016)



藤田 六郎兵衛

能楽笛方 藤田流十一世宗家

活動期間 平成 28 年 2 月 23 日～3 月 30 日

活動国 イギリス、フランス、韓国

Rokurobyoue Fujita

Noh Flute Player / 11th Generation Master, Fujita School of Noh Flute

Period of the activities: From February 23 to March 30, 2016

Countries visited: United Kingdom, France and Korea

「文化交流使」の 37 日が私に遺したもの

「藤田さん、スケジュールをひと月空けることは可能ですか？」

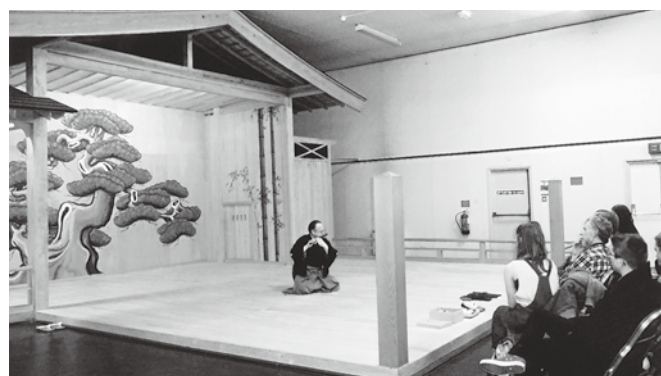
3 年程前、雑談の中で文化庁の国際文化交流室の方から、そんな質問があった。

「何とかなる月があるかもしれませんね」と軽く答えたことが、じつは、とんでもないことになった。

ある日、一本の電話。「決まりました!」「何が?」「交流使に」「何ですか、それ?」。こんなトンチンカンなやり取りからスタートした。「何とか来年度中にひと月」と言われても、能の世界は 3 年先の予定まで入る。このところ私はずっと「3 年手帳」を使っている。レギュラーな催しと、その間を埋める催し。最近は歳のせいか、「それまで生きていれば」と一言発してから手帳に記入することもある。

そして何とかひと月を空けて、さあ「文化交流使」の仕組みのお勉強だ。予算がつくもの、つかないもの。宿泊費にも地域で上限があり、タクシーはだめ。通訳は、会場費は、印刷費は……。理解できたのは、事前に予算を立てるのはほぼ不可能ということだった。

私は、各国の大使館や領事館にはお世話にならず、ロンドン在住の日本人のコーディネーター、パリの写真家、韓国に太い人脈を持っている友人、三人の個人的ルートにす



イギリス サリー州エガム ロイヤル・ホロウェイ (ロンドン大学) 半田能楽シアター。2016/2/25 Handa Noh Theatre, Royal Holloway, University of London in Egham, Surrey, the UK (February 25, 2016)

べてを託した。私に出来ることは、能の笛の家に生まれ、五歳からプロとして活動をしている身体を現地に持っていくこと。そして音楽高校から声楽を学び、音大卒業後も助手を勤めた西洋音楽の体験と知識。東洋の文化「能」と、西洋の文化「クラシック音楽」の両方を体現しながら、海外の人々に「理解できること」と「理解しにくいこと」をレクチャーしながら交流する。それが私の役目だと、活動がスタートしてから気付いた。

当初は、出演している能の DVD を上映し、能管の指導と演奏を、と思っていたが、キリスト教文化と神道や仏教、「自然」に対する感性の違いは大きい。現地で考え、感じながら、「無音の世界の音」について語り、緩急の笛の演奏を共有するパターンに変えた。

通訳もロンドンでは演劇、パリでは日本近代文学、韓国では日本古典文学を専門とする人材を得て、観客の琴線に触れ得たと思う。とくに韓国では、光州事件記念公園で慰霊の演奏をする機会を得た。ここでの衝撃的な体験は、能の笛の持つ「鎮魂」の力をあらためて教えてくれた。生涯忘れられぬ記憶となるだろう。「文化交流使」の 37 日間 15 回の活動は、私の 63 年の人生に、何物にも代えがたい大きな贈り物となった。御礼を申し上げる。



フランス パリ市内 パリ・コンセルヴァトワール。2016/3/17 Conservatoire de Paris, Paris, France (March 17, 2016)

Invaluable 37 days as Japan Cultural Envoy

“Mr. Fujita, can you leave a whole month open for us?”

About three years ago, an official from the Office for International Cultural Exchange at the Agency for Cultural Affairs asked me this in the midst of a casual conversation. I answered, “Maybe there will be a month when I can manage to do so,” without thinking much about what it might entail, and sure enough, my reply brought overwhelming consequences.

One day, I got a phone call telling me that it had been decided.

“What has been decided?”

“That you’re to be a Japan Cultural Envoy.”

“What’s that?”

This bizarre interaction began my mission as cultural envoy. They then asked me if I could make an effort to spend one month the following year serving as envoy. However, in the world of Noh, we fill our calendar with performances and events three years in advance. To cope with that, I use a three-year planner. I have regular engagements, and other events which fill all the time in between. Because of my age, I sometimes mark my calendar while murmuring to myself, “If I’m still alive.”

Eventually, I managed to take a whole month off and there began a study on how the Japan Cultural Envoy system works. There were things which could be included in the budget and things which could not, limits on how much I could spend on accommodations depending on where I went, and the fact that taxi fees could not be reimbursed. I also had to think about interpreters, venue fees, printing expenses, etc. The only thing I understood well was that it was almost impossible to budget each mission in advance!

I decided not to ask for support from embassies and consular offices in the countries I was visiting, and instead asked three personal contacts to make various arrangements: a London-based Japanese coordinator, a photographer in Paris, and a friend who had a strong network in Korea. My mission was to be there physically, carrying with me my experiences of being born into a family of Noh flutists, starting my professional career at the age of five, receiving vocal training during my years at a music high school, and gaining experience in and knowledge of Western music as a teaching assistant after graduating from music college. I realized after I began

serving as cultural envoy that my role was to give lectures not only on “what can be easily understood,” but also on “what cannot easily be conveyed” to people outside Japan, and to interact with them, while serving as a bridge between Eastern “Noh” and Western “classical music.”

My initial plan was to play a DVD of a Noh play in which I performed, followed by a workshop with a live performance, but then I realized that there was a significant difference in feelings of affinity with nature between the perspectives of Shintoism or Buddhism and that of Christianity in the places I was to visit. I changed my plan, deciding how I should carry out my mission once I was in each country, and letting my senses lead in telling people about “the sound of the world without sound,” and sharing with my audiences the time and space of a flute performance using a variety of rhythms and tempos.

For interpreters, I was privileged to have a theater specialist in London, an expert in modern Japanese literature in Paris, and an expert in Japanese classical literature in Korea, all of whom I believe translated my words in a way that touched the audience’s hearts. In Korea, especially, I had the privilege of performing at the 5·18 Memorial Park in Gwangju, in tribute to those who died in the democratic uprising. Performing there was an extraordinary experience which re-taught me the power of the Noh flute to give repose to souls. It was a moment that I shall never forget. My 37-day mission as Japan Cultural Envoy, during which I engaged in 15 activities, became a precious gift for my 63-year lifetime which I would not trade for anything. I’d like to express my deep gratitude for being chosen for this honor.



韓国 光州市 靑齋美術館。2016/3/23

Uijae Museum of Korean Art, Gwangju, Korea (March 23, 2016)



矢内原 美邦

振付家、劇作家、近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授

活動期間 平成 27 年 8 月 22 日～平成 28 年 1 月 31 日

活動国 シンガポール、マレーシア、韓国、タイ、ミャンマー、ベトナム、アメリカ合衆国、インドネシア、フィリピン

Mikuni Yanaihara

Choreographer, Director, Play writer / Associate professor of Performing arts course, Kindai University

Period of the activities: From August 22, 2015 to January 31, 2016

Countries visited: Singapore, Malaysia, Korea, Thailand, Myanmar, Vietnam, United States, Indonesia and the Philippines

文化交流使の経験

日本を出て数か月、シンガポール、ミャンマー、ベトナム、マレーシア、タイ、インドネシアと、他の国の人々と舞台を創るために東南アジアの国々を回る。日本はもう寒くなったのだからこちらはどこへ行っても夏。まるで季節が止まったようで、行く先々の屋台で買ったTシャツがスーツケースをいっぱいになっている。新しい国に来た時はいつも空港からのタクシーの車中から、これからこの町でどんな出会いがまっているだろうかと、立ち並ぶ高層ビルと、そのうえに広がる青い空を眺めていた。どこへ行ってもまず感じることは同じ。この国でちゃんと作品を発表できるだろうかという不安ばかりが先に立つ。それでもその不安が大きければ大きいほど、きっとそこには素晴らしい出会いと発見があるだろうと、これまでの経験でそんな期待に心を躍らせる。

8月、バンコクではテロ事件が起こり観光客も犠牲になった。その現場が稽古場のすぐ近くにある。買い物に行くときはいつもそのそばを通る。ここで人が死んだのか。と、何もなかったようにたくさんの車が行き交う街角を眺め、足早に町に行く人の波に飲み込まれる。そんな時、どうして私はここにいるのだろうか、ふと考える。右も左もわ



タイバンコクシアターフェスティバル参加作品『戦略的な孤独』

Strategic Loneliness, an entry to the Bangkok Theatre Festival in Thailand

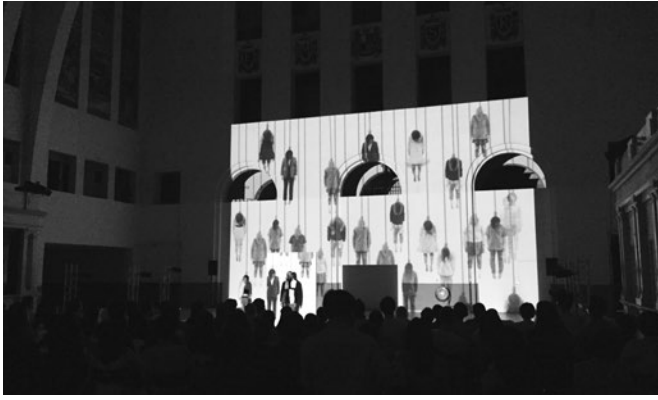
からないこの町で、いったいなにができるのだろうかと不安にかられながらも、国際交流基金に助けていただきバンコクシアターフェスティバルに参加することができた。また、バンコクシアターフェスティバルでは、上演した『戦略的な孤独』が脚本、演出、助演女優賞にノミネートされ、出演してくれたタイの女優ゴルフさんが助演女優賞を受賞した。

アジアにはたくさんの国があるけれど、生活レベルも、モノの価値観も違うし、言語も、宗教も、民族もみんなそれぞれ違う。アジアの歴史について述べれば、先の大戦で日本の被害を受けなかった国を探す方が大変かもしれない。そんな状況の中、ここでどのような活動をしていくべきなのかを考えなければいけない。答えを探し、いろいろな人と会うたびに、もっと別の答えがあるのではないかと考える。その人、その国の立場に立って物事を見つめることで、私たちの国の在り方もきっと見えてくるのだろう。目に見える簡単なこと以外はなんにもわかってない。私に何かができるとは勿論言えないが、試してみるくらいは許されているだろう。

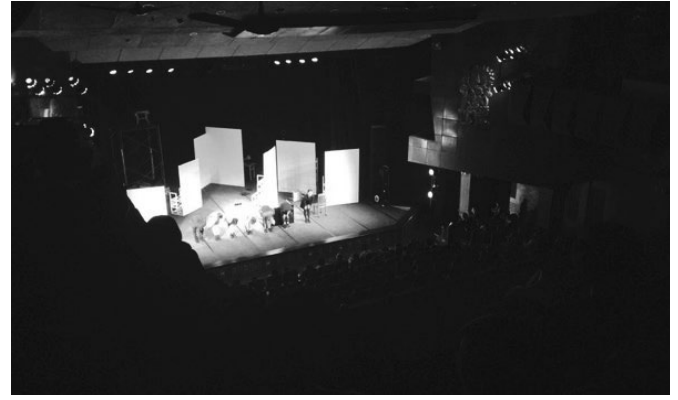


タイバンコクシアターフェスティバル参加作品『戦略的な孤独』

Strategic Loneliness, an entry to the Bangkok Theatre Festival in Thailand



シンガポールシアターインターナショナルアートフェスティバル参加作品
An entry to the Singapore International Festival of Arts (Theatre)



ベトナム ニブロール公演の様子
Nibroll performance in Vietnam

My experience as Japan Cultural Envoy

For several months after departing from Japan, I travelled around the Southeast Asian countries, Singapore, Myanmar, Vietnam, Malaysia, Thailand and Indonesia to create stage with artists in these countries. When I think of Japan, I wonder the cold season has already come. Yet, here in Southeast Asia, summer is everywhere as if the seasons have forgotten to transit. T-shirts I bought at street stands wherever I go swell my suitcase. Whenever I arrived in a country for the first time, I took a taxi from the airport and always thought what encounters awaited me in this new world, looking up high-rise buildings and the blue sky above them. In any country I visit, the same idea crosses my mind. Am I able to properly present my works in this country? The worry spreads in my mind. At the same time, however, the more my anxiety grows, the more chances seem to await me for delightful encounters and discovery. My past experiences have planted such a promise in my mind. It makes me excited and I cannot wait for them.

In August, many people including tourists passed away because of a terrorist attack in central Bangkok. Our rehearsal hall is very close to the scene. Whenever I go shopping, I pass by the street. This is where people died, isn't it? I look at the busy street corner where many cars go by as if nothing has happened there. People pass by the corner briskly and I fall into myself the wave of those people. At such a time, the phrase, "Why am I here?" comes to mind. What can a perfect stranger ever do in this town? Worry haunts me. By supporting from the Japan Foundation, I could participate in the Bangkok Theatre Festival. Here is my *Strategic Loneliness*. It was staged and nominated for the script, direction and supporting actress prizes. A Thai actress Gorufu won the best supporting actress

prize.

There are a variety of countries in Asia, each having different levels of life and different sets of values. Furthermore, languages, religions and nations are all diverse and distinctive. Talking of Asian history, it might be difficult to identify the countries that did not suffer war-time damages more than 70 years ago. Under these circumstances, we should strongly consider the type of activities that we should carry out here. A journey in the quest for answers and encounters with various people leads me to ponder over the possibility of other answers. By seeing things from the perspective of each country and people there, we might be able to see what our home country should be like. We may not have understood anything except simple and superficial matters. Of course, I am unable to say what I can do. I believe, however, that I am allowed to at least give it a try.



ベトナム ニブロール公演の始まりを待つ人々
The audience in Vietnam waits for the start of the Nibroll performance



吉田 健一

「吉田兄弟」、津軽三味線奏者

活動期間 平成 28 年 3 月 27 日～5 月 25 日

活動国 オランダ、スペイン、イタリア、ポルトガル

Kenichi Yoshida

"Yoshida Brothers", Tsugaru Shamisen player

Period of the activities: From March 27 to May 25, 2016

Countries visited: The Netherlands, Spain, Italy and Portugal

海外における日本文化発信拠点の構築

オランダ／アムステルフェーンでの「吉田兄弟公演」
スペイン／マドリード・バレンシアでの吉田健一ソロ公演

これまでの活動を通して、「吉田兄弟」という名前の知名度は現在もあり、やり方次第では更なる日本文化の発信、発展に繋がれることを再確認した。しかし課題も多くある。今回のような活動や公演をする度に感じることは言葉の壁である。単に通訳の方がいれば良い、或いは、英語が出来れば良いというものではなく、文化交流である以上、現地の文化に歩み寄ることが絶対的に必要であり、それが後の交流に影響してくるからである。これは、現地協力機関などとの事前の打合せやフォローにより、改善出来るのではないかと。

スペイン／マドリード、イタリア／ローマ、ポルトガル／リスボン、カタルーニャ エイサンプル市立音楽学校、バルセロナ日本人学校でのレクチャー&デモンストレーション

楽器の歴史、構造などの説明をした後、現在の伝統文化が日本国内外においてどのような広がりを見せているのかを映像や演奏を通して伝え、最後に質疑応答で理解を深め



レクチャー&デモンストレーション／リスボン オリент博物館
Lecture and demonstration at the Museum of the Orient in Lisbon

るという内容のものであった。このレクチャー&デモンストレーションの利点は、通常公演に比べ、事前準備や費用などを抑えることが出来ることにある。

また、日本文化に興味のある人達を増やす絶好の機会であり、この層の開拓こそが今後の文化の発信に繋がると考える。大事なものは、人と人とのコミュニケーションから生まれる発展だ。どれだけインターネットやSNSが発達しようとも、これに勝るものはないと思う。

ESMUC カタルーニャ高等音楽院での特別授業

今回の中心的プロジェクトである。僕が何故バルセロナに拠点を置いたのか。それは先ず、この街には異国の文化を受け入れる土壌があると感じたからだ。あらゆる文化がこのスペインから生まれている。フラメンコもその一つだ。日本で言う民謡であり、津軽三味線との類似点を多々感じている。

文化交流において必ず上がる課題は費用と人材である。限られた時間、経費で恒久的なプロジェクトにしていくには、現地で活動することの出来る伝道師的な存在が必要となる。そこで、目を向けたのが音楽大学である。楽器のプロを目指す者であれば、他国の楽器に興味を示す可能性は高く、上達も早い。事実、マスタークラスを受講したリユーとクラシックギターの生徒は、8回の授業で僕が作曲した課題曲を完全にマスターし、アドリブが出来るまでに上達した。これは通常ではあり得ないスピードだ。

最後の発表会の後、彼らは「津軽三味線を弾き続けたい！」と言ってくれた。ここで初めて本当の意味での文化交流が生まれ、僕が受講生に伝えたことは、僕自身がそこに存在しなくとも、彼ら自身が一つの発信拠点として日本文化を広める役割を果たし、日本に興味を持つ方々が増えていくことに繋がっていくのだと思う。

Creating an overseas hub for dissemination of Japanese culture

**“Yoshida Brothers concert” in Amstelveen (the Netherlands),
Kenichi Yoshida solo concert in Madrid and Valencia (Spain)**

I reaffirmed that we would be able to further disseminate and develop Japan’s culture as long as we pursue better approaches to it. I reached this conclusion through my past activities that were owed partly to the recognition of the “Yoshida Brothers” name. However, we must address many challenges. Every time I engage in these types of activities and performances, I cannot help thinking about language barriers. This does not mean that we can manage if we just have an interpreter or if only we can speak English. In cultural exchange, it is absolutely essential for us to reach out to local culture. The ensuing stage of cultural exchange will be influenced by this basic approach. I expect this language barrier issue to be alleviated by preliminary arrangements with local cooperation agencies and its follow-up measures to nurture the bud of exchange.

Lectures and shamisen demonstrations in Madrid (Spain), Rome (Italy) and Lisbon (Portugal) as well as at the Eixample Municipal School of Music, Catalonia and the Japanese School in Barcelona (both in Spain)

At the beginning I explained the history of shamisen and its structure as a musical instrument. Then I showed video pictures and demonstrated my performance to show how the traditional culture of Japan is penetrating into society in and out of Japan. Finally, I held a question-and-answer session to deepen students’ understanding. One big advantage of this lecture and demonstration approach is that it curbs expenses and time for preparations compared with ordinary concerts.

At the same time, it serves as a perfect opportunity to increase the numbers of people who have an interest in Japanese culture. I believe expanding this new group of people will lead to the future dissemination of our culture. The important point is the development of culture through face-to-face communication between people, no matter how much the Internet and social networking service (SNS) may develop, nothing will surpass human communication.



特別授業／カタルーニャ エイサンプル市立音楽学校
Special class at the Eixample Municipal School of Music, Catalonia

Special classes at the Catalonia College of Music (ESMUC)

The project here was the main activity as a Japan Cultural Envoy. Why did I base my activities in Barcelona? First of all, I sensed that the city has an atmosphere and the foundation to accept different cultures. Many cultures were born in Spain, including flamenco. Flamenco is a type of folk music and has a lot of similarities with Tsugaru shamisen.

In cultural exchange, matters of expenses and human resources are a continual consideration. To keep our project sustainable with limited time and expenses, we need someone who can engage in activities in the target area like a preacher. So I focused on the role of the music college. Students who aim at being a professional player of musical instruments have a high probability of being interested in instruments of other countries and make quick progress with them. In fact, in a series of eight classes, students of the lute and classical guitar who took the master’s course perfectly performed the commissioned set piece that I had composed. Moreover, they came to improvise. That was an unbelievable speed of progress, unseen in normal cases.

After the last recital, they said, “We want to continue playing Tsugaru shamisen!” Here, the real cultural exchange could be seen to take root. What I conveyed to my students was ingrained in their mind. Now, even without my existence there, they will serve as a hub to spread Japanese culture globally. More people will come to nurture interest in Japan.

◎ 編集について

・文化交流使による活動報告は、筆者本人の表現を尊重しており、公文書上の表記方法等とは異なる場合があります。

◎ Note

- We respect the right of Japan Cultural Envoys to express themselves individually in presenting these activity reports, so please be aware that the terminology used may not necessarily follow official guidelines.



文化交流使一覽

文化庁文化交流使一覧

2016年3月現在

「文化交流使」には5つのカテゴリーがあります。

1. 長期派遣型
- 日本在住の芸術家、文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーション等を行います。
(平成27年度～)
2. 海外派遣型
- 日本在住の芸術家、文化人等が諸外国に一定期間（1か月～12か月）滞在し、それぞれの専門分野で講演、講習や実演、デモンストレーション等を行いました。
(平成15年度～平成26年度実施)
3. 短期指名型
- 国際芸術交流支援事業により海外で公演等を行う芸術団体等が、現地の学校等で実演会、演奏会等を行い、日本文化の普及活動を行いました。(平成20年度～平成25年度実施)
4. 現地滞在者型
- 海外在住の芸術家、文化人等がその滞在国内で、それぞれの専門分野で講演、講習や実演デモンストレーション等を行いました。(平成15年度～平成21年度実施)
5. 来日芸術家型
- 公演等で来日する諸外国の著名な芸術家、文化人が、日本滞在国内を利用して学校等を訪問し、実演、講演等を行いました。(平成15年度～平成19年度実施)

平成15年度（2003年）
○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 12名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
三浦 尚之 ^{なおゆき}	音楽プロデューサー	アメリカ	平成15年7月20日～9月1日
渡辺 洋一	和太鼓奏者	アメリカ	平成15年8月15日～9月6日
田中 千世子	映画評論家	ヨルダン、スロバキア、アイスランド、ハンガリー	平成15年8月15日～12月9日
小山内 美江子 ^{おさない}	脚本家	カンボジア	平成15年8月20日～9月24日
梅林 茂	作曲家	イタリア	平成15年8月27日～11月8日
国本 武春*	浪曲師	アメリカ	平成15年9月12日～平成16年8月10日
パロン吉元	漫画家	スウェーデン	平成15年9月22日～11月21日
三谷 温 ^{おん} *	ピアニスト	クロアチア	平成15年9月27日～平成16年5月14日
笑福亭 鶴笑 ^{おくしゅう} *	落語家	タイ、イギリス	平成15年12月1日～平成16年1月15日、平成16年3月30日～平成17年3月29日
小宮 孝泰*	俳優	イギリス	平成16年1月16日～5月11日
平野 啓一郎*	作家	フランス	平成16年2月28日～平成17年2月27日
四方田 犬彦 ^{よもた} *	映画評論家	イスラエル、セルビアモンテネグロ	平成16年3月15日～12月20日

〈現地滞在者型 ― 4名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
高岡 美知子*	答礼人形研究家	アメリカ	平成16年3月1日～平成17年2月28日
松本 直み ^{なお} *	舞台照明研究家	フィリピン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ラーシュ・ヴァリエ*	詩人、スウェーデン議会国際課長	スウェーデン	平成16年3月1日～平成17年2月28日
ローチャン由理子*	画家	インド	平成16年3月1日～平成17年2月28日

〈来日芸術家型 ― 5組〉

氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
ソレダット	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成15年10月15日	代々木高等学院
ケント・ナガノ	指揮者	アメリカ	平成15年10月30日	品川区立立会小学校
ルノー・カブソン	ヴァイオリニスト	フランス	平成16年1月7日	東村山老人ホーム
クリスティアン・アルミンク	新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督	オーストリア	平成16年1月14日	墨田区立両国中学校
ディビット・バイヤット	ホルン奏者	イギリス	平成16年3月15日	福岡市立舞鶴中学校

平成16年度（2004年）
○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 5名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
北村 昭章 ^{しょうさけい}	重要無形文化財「螺鈿」(各個認定)保持者	ドイツ	平成16年6月2日～7月10日
杉本 洋 ^{ひらし}	日本画家	カナダ	平成16年9月1日～11月30日
橋口 譲二*	写真家	ドイツ	平成16年12月13日～平成17年12月12日

井上 廣子*	造形作家	オーストリア	平成17年1月10日～平成18年1月9日
宮田 まゆみ	笙演奏家	ギリシャ, イタリア, フランス, ドイツ, ルクセンブルク	平成17年2月1日～2月28日

〈来日芸術家型 ― 5組〉

氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
イシュトヴァーン・コロッシュ	オルガニスト	ハンガリー	平成16年6月12日	桜美林大学
エムパイヤ・プラス	金管五重奏	アメリカ	平成16年6月14日	神戸市立港島小学校
フランソワ・ルルー	オーボエ奏者	フランス	平成16年10月5日	長崎市立山里小学校
カール・ライスター	クラリネット奏者	ドイツ	平成16年10月19日	名古屋市立見付小学校
デニス・マトヴィエンコ	バレエダンサー	ウクライナ	平成17年3月3日	品川女子学院高等部

平成17年度（2005年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 5名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
河村 晴久	能楽師	アメリカ	平成17年4月14日～5月25日
村井 健	演劇評論家	ロシア	平成17年5月3日～6月9日
神田 山陽*	講談師	イタリア	平成17年9月1日～平成18年8月31日
平田 オリザ	劇作家, 演出家	カナダ, アメリカ	平成18年1月3日～3月31日
Ikuro 三橋*	演出家	フランス, ベルギー, モロッコ, マダガスカル	平成18年1月15日～12月14日

〈現地滞在者型 ― 2名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
杉 葉子	女優	アメリカ	平成17年5月2日～10月31日
本名 徹次*	指揮者	ベトナム	平成17年11月17日～平成18年11月16日

〈来日芸術家型 ― 6組〉

氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
オクトバス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成17年6月15日	東京国際学園高等部
アンヘル・コレーラ	バレエダンサー	スペイン	平成17年7月24日	六本木ヒルズ
ソレグッド	タンゴ・クインテット	ベルギー	平成17年7月25日	愛知県立明和高等学校
10人のミラクル・トランペッター TEN OF THE BEST	トランペット・アンサンブル	ドイツ	平成17年12月11日	秋田県立勝平養護学校
ラルス・フォークト	ピアニスト	ドイツ	平成18年2月6日	東京都立芝商業高等学校
日豪ジャズオーケストラ参加 オーストラリア・ミュージシャン	ジャズオーケストラ	オーストラリア	平成18年3月20日	広島県立尾道北高等学校

平成18年度（2006年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 9名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
寺内 直子	神戸大学教授 日本の宮廷音楽・雅楽の研究及び演奏	アメリカ	平成18年8月28日～平成19年3月30日
源田 悦夫	九州大学教授メディア芸術・情報デザイン	中国, 韓国	平成18年8月31日～10月25日
川井 春香	華道家	スウェーデン, スペイン, イタリア, フランス	平成18年9月12日～12月15日
勝美 巴湖*	日本舞踊家	イギリス	平成18年12月26日～平成19年7月15日

坂手 洋二*	劇作家, 演出家	アメリカ, フランス, ドイツ	平成19年2月5日～4月13日
桂 小春園治	落語家	アメリカ	平成19年2月6日～3月10日
豊澤 富助	人形浄瑠璃文楽	イギリス, ドイツ, スイス, イタリア	平成19年2月26日～3月28日
寺井 栄*	能楽師 (能楽観世流シテ方)	オーストラリア	平成19年3月5日～5月30日
小林 千寿*	囲碁棋士	オーストリア, スイス, ドイツ, フランス	平成19年3月14日～平成20年3月13日

〈現地滞在者型 ―― 1名〉

氏 名／団体名	プロフィール	活動国	活動期間
大坪 光泉*	華道家	中国	平成18年9月15日～平成19年9月14日

〈来日芸術家型 ―― 9組〉

氏 名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
アドリエル・ゴメス・マンスール	ピアニスト	アルゼンチン	平成18年4月24日	大分県日出町立日出小学校
オクトパス4	コントラバス四重奏	イタリア	平成18年6月20日	NPO楠の木学園 (横浜)
ジョン・ナカマツ	ピアニスト	アメリカ	平成18年7月10日, 11日	新潟県立新潟盲学校, 新潟県立上越養護学校
ペーター・シュミードル	クラリネット奏者	オーストリア	平成18年7月14日	北海道立真駒内養護学校
エミリー・バイノン	フルート奏者	オランダ	平成18年7月22日	上 甕老人福祉センター
ヴォルフガング・シュルツ	フルート奏者	オーストリア	平成18年8月26日	草津町立草津中学校
オーブリー・メロー	舞台演出家, オーストラリア国立演劇学校校長	オーストラリア	平成18年9月28日	東京都立富士高等学校
ツェンド・パットチョローン	モンゴル国立馬頭琴交響楽団芸術監督・指揮者	モンゴル	平成18年10月13日, 20日	相模原市立若松小学校, 板橋区立志村第四小学校
フランツ・リスト室内管弦楽団	管弦楽団	ハンガリー	平成19年1月18日	北海道帯広養護学校

平成19年度 (2007年) ○派遣順 *印は, 次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ―― 9名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
立松 和平	作家	中国	平成19年4月27日～5月26日
三浦 友馨	華道家	中国	平成19年8月1日～9月28日
名嘉 睦稔	画家	韓国, フランス, スペイン	平成19年8月30日～11月13日
本間 博*	将棋棋士	フランス, イギリス, ドイツ, スペイン, モナコ	平成19年8月30日～平成20年5月29日
中村 享	盆栽作家	カナダ	平成19年9月5日～10月6日
円田 秀樹*	囲碁棋士	ブラジル, 中南米諸国, アフリカ	平成19年10月2日～平成20年7月1日
湯山 東	画家	フランス, チェコ, ドイツ	平成19年11月2日～12月19日
桂 かい枝*	落語家	アメリカ	平成20年3月31日～10月1日
橘 右門*	寄席文字書家	イギリス, ドイツ, ハンガリー	平成20年3月31日～平成21年2月16日

〈来日芸術家型 ―― 7組〉

氏名／団体名	プロフィール	在住国	活動期間	活動場所
セルゲイ・ナカリャコフ	トランペット奏者	フランス	平成19年4月17日	大分県日田市立桂林小学校
ファジル・サイ	ピアニスト	トルコ	平成19年7月11日	渋谷区立小学校
イアン・パウスフィールド	トロンボーン奏者	イギリス	平成19年7月14日	札幌市立札幌小学校
チェコ少年少女合唱団	合唱団	チェコ	平成19年7月30日	北九州市立穴生中学校
アントニー・シビリ	ピアニスト	アメリカ	平成19年8月23日	群馬県立西邑楽高等学校
イングリット・フリッター	ピアニスト	イタリア	平成19年9月29日	滝乃川学園一橋大学
ニコラ・ルーツェヴィチ	チェロ奏者	クロアチア	平成20年3月18日, 19日	北海道音更高校中札内文化創造センター

平成20年度（2008年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
島田 雅彦	作家	アメリカ、韓国	平成20年7月1日～平成21年3月31日
千 ^ち 宗屋 ^{むね} *	茶道家	アメリカ、フランス、イタリア、イギリス、ドイツ、モナコ、メキシコ、ベルギー	平成20年7月31日～平成21年6月30日
梅若 ^{うめわか} 猶彦 ^{なほひこ}	能楽師（シテ方）、静岡文化芸術大学教授	フィリピン	平成20年8月2日～9月8日
小林 ^{こばやし} 千寿 ^{ちず}	囲碁棋士	フランス、オーストリア、ドイツ、スイス、イギリス	平成20年8月27日～平成21年3月26日
中川 ^{なかつかわ} 衛 ^ゑ	重要無形文化財「彫金」（各個認定）保持者	アメリカ	平成20年9月8日～10月20日
常磐津 ^{とこわづ} 文字兵衛 ^{ももじべゑ}	常磐津三味線奏者、作曲家	韓国	平成20年9月27日～10月27日
福田 ^{ふくだ} 栄香 ^{えいか} （千栄子改め）	地歌箏曲演奏家	フィリピン、インドネシア、マレーシア	平成21年2月17日～3月16日
須田 ^{すだ} 賢司*	木工芸作家	ニュージーランド	平成21年3月22日～5月4日

〈現地滞在者型 ― 2名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
上野 ^{こうしやうざん} 宏秀山*	尺八奏者	シンガポール	平成21年2月1日～4月30日
ブーイ ^{ふみこ} 文子*	茶道家	タイ、インド	平成21年2月1日～4月30日

〈短期指名型 ― 5組〉

団体名	分野	在住国	活動期間	備考
財団法人日本伝統文化振興財団 狂言		インドネシア	平成20年9月3日、5日	山本東次郎家、狂言公演
舞踊集団菊の会	舞踊（邦舞）	ブラジル	平成20年9月16日、25日	
太神楽曲芸協会 ^{たいかぐらまことびげいぎょうかい}	太神楽曲芸	カンボジア	平成20年12月3日	
鬼太鼓座 ^{おんでこぎ}	和太鼓	ブラジル	平成20年12月16日	
大歌舞伎「NINAGAWA十二夜」 ロンドン公演実行委員会	歌舞伎	イギリス	平成21年3月26日	

平成21年度（2009年） ○派遣順

〈海外派遣型 ― 10名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
有野 ^{よしと} 芳人	将棋棋士	中国	平成21年5月27日～8月9日
青木 紳一	囲碁棋士	オランダ、オーストリア、ドイツ、スロバキア	平成21年7月24日～12月27日
喜瀬 ^{きせ} 慎仁 ^{しんじん}	三線奏者	フィリピン、中国、フランス、ドイツ、イギリス	平成21年8月1日～平成22年1月31日
鶴賀 ^{つるが} 若狭掾 ^{わかさのじよう}	重要無形文化財「新内節浄瑠璃」（各個認定）保持者	イギリス、アイルランド、オランダ、ベルギー	平成21年9月14日～10月29日
竹本 ^{たけもと} 千歳大夫 ^{ちとせだゆう}	人形浄瑠璃文楽	チェコ、ドイツ、オーストリア	平成21年9月24日～10月24日
蜂谷 ^{はちや} 宗苾 ^{そうひつ}	香道家元後継者	フランス、中国、モナコ、イタリア、ドイツ、バーレーン、アメリカ、シンガポール、フィンランド	平成21年9月30日～平成22年3月24日
武岡 ^{たけおか} 翠瑩 ^{すいこう}	竹工芸家	ドイツ	平成21年10月11日～11月17日
伊部 京子	和紙造形家	アメリカ、エジプト	平成21年11月3日～平成22年3月3日
久保 ^{くぼ} 修	切り絵画家	アメリカ	平成21年12月30日～平成22年3月26日
三橋 ^{みはし} 貴風	尺八演奏家	韓国、ブラジル	平成22年2月5日～3月23日

〈現地滞在者型 ― 1名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
澤崎 ^{さわさき} 琢磨 ^{たくま}	和太鼓奏者	パラグアイ、ブラジル	平成21年8月1日～10月31日

〈短期指名型 ― 5組〉

団体名	分野	活動国	活動期間	備考
NPO法人和文化交流普及協会	伝統芸能（獅子舞、津軽三味線、和太鼓等）	ウルグアイ	平成21年9月7日、8日	
さるがくかい 猿楽會	狂言	オーストリア	平成21年10月13日	
社団法人落語芸術協会	落語	カンボジア	平成21年11月25日	
株式会社オフィスK2	和太鼓	ウズベキスタン	平成22年1月23日、24日、26日	和太鼓「婢弥鼓」
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成22年2月22日	

平成22年度（2010年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 12名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
まどか 黛 まどか	俳人	フランス、イギリス、ルーマニア、ベルギー	平成22年4月24日～平成23年3月25日
いわみ せいじ*	漫画家	シンガポール、マレーシア、韓国、イギリス	平成22年8月4日～平成23年7月31日
まゑ 藤間 万恵*	日本舞踊家	中国	平成22年9月4日～平成23年7月16日
やすひと 佐々木 康人	華道家	ベトナム、シンガポール、タイ、マレーシア	平成22年9月9日～11月14日
みゆき 養輪 敏泰	和太鼓奏者	メキシコ	平成22年9月20日～10月26日
ぎんべい 笑福亭 銀瓶	落語家	韓国	平成22年9月30日～10月31日
山村 浩二	アニメーション作家	カナダ	平成22年11月12日～12月19日
やすとし 安田 泰敏	囲碁棋士	オーストリア、スイス、フランス、ロシア、ヨルダン、イスラエル、モロッコ	平成22年11月15日～平成23年2月28日
野田 哲也	版画家	イスラエル、イギリス	平成22年12月3日～平成23年1月17日
けんじ 山内 健司	俳優	フランス、スイス、ベルギー	平成23年1月7日～3月31日
かつなり 澤田 勝成	津軽三味線奏者	中国	平成23年2月20日～3月20日
れいじろう 津村 禮次郎*	能楽師	ロシア、ハンガリー	平成23年2月24日～4月9日

〈短期指名型 ― 4組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
一般社団法人日本伝統芸術国際交流協会	沖縄舞踊	メキシコ	平成22年10月19日
財団法人日本余暇文化振興会	津軽三味線	メキシコ	平成22年10月23日
有限会社アトリエ・アサクラ	日本舞踊	韓国	平成22年10月28日、29日、11月1日、2日
こんばるりゅう 金春流能ドイツ巡回公演実行委員会	能	ドイツ	平成23年1月20日、28日

平成23年度（2011年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 6名・1グループ〉

氏 名／グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
なおゆき 真鍋 尚之*	雅楽演奏家、作曲家	ドイツ、フランス、オーストリア、スウェーデン、ロシア、ベルギー、オランダ、イタリア、スイス、ベラルーシ、チェコ、セルビア	平成23年5月14日～平成24年5月13日
ときとも ひさこ 時友 尚子	染色家	エストニア、ラトビア、リトアニア、フィンランド	平成23年10月26日～11月25日
とうせん 薄田 東仙	書道家、刻字家	イスラエル	平成23年10月27日～12月4日
辰巳 満次郎*	能楽師	韓国	平成24年1月9日～4月19日
AUN（井上良平、井上公平、齋藤秀之）	和楽器奏者	タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア	平成24年1月21日～2月25日
塩田 千春	現代美術家	オーストラリア	平成24年2月7日～3月7日
さ さ き ゆきつな 佐佐木 幸綱*	歌人	ドイツ、ポーランド、スイス、フランス、オランダ	平成24年3月8日～6月4日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
こでん 話傳の会	人形浄瑠璃文楽（素浄瑠璃）	ドイツ	平成23年9月26日
ミュージック・フロム・ジャパン 推進実行委員会	雅楽	アメリカ	平成24年2月21日
特定非営利活動法人ACT.JT	伝統芸能、大衆芸能	アメリカ	平成24年3月26日～28日

平成24年度（2012年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名・1グループ〉

氏 名／グループ名	プロフィール	活動国	活動期間
えのき じゅ ゆき 榎戸 二幸	生田流箏曲	ドイツ、オーストリア、イギリス	平成24年5月28日～8月31日
うるま てるび（うるま、でるび）*	アニメーション・アーティスト	アメリカ	平成24年9月2日～平成25年8月31日
もとひこ 茂山 宗彦*	大蔵流狂言師	チェコ、オーストリア、ルーマニア、リトアニア、ポーランド	平成24年10月3日～平成25年7月3日
矢崎 彦太郎	指揮者	アルジェリア	平成24年12月6日～平成25年3月16日
えび はら ろ げん 海老原 露巖	墨アーティスト、書道家	イタリア	平成25年1月20日～2月23日
よしかず 藤本 吉利	和太鼓奏者	中国	平成25年1月21日～2月21日
小島 千絵子	民俗舞踊家	スペイン、ポルトガル、ベルギー、イギリス	平成25年1月21日～3月11日
やま じ 山路 みほ*	箏曲演奏家	ロシア、ドイツ、イタリア、スイス、スロベニア、オーストリア、 スロバキア、フィンランド、ラトビア、ハンガリー	平成25年1月27日～6月30日
大澤 奈留美*	囲碁棋士	アメリカ、ブラジル	平成25年3月14日～5月13日

〈短期指名型 ― 3組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
くろもりかぐら 黒森神楽アメリカ公演実行委員会	伝統芸能、大衆芸能	アメリカ	平成24年10月31日
コンドルズ	舞踊	タイ	平成25年3月1日
公益財団法人せたがや文化財団 演劇		アメリカ	平成25年3月25日

平成25年度（2013年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
土佐 信道	明和電機社長、アーティスト	フランス	平成25年6月3日～7月11日
まさし 平尾 成志	盆栽師	リトアニア、イタリア、フランス、オランダ、アメリカ、 メキシコ、オーストラリア、ドイツ、トルコ	平成25年6月11日～10月24日
そいうん 武田 双雲	書道家	ベトナム、インドネシア	平成25年7月31日～8月31日
えい じょう レナード 衛藤*	和太鼓奏者	スイス、フランス、イタリア、チュニジア、ポルトガル、 インド、オランダ、ドイツ、ハンガリー	平成25年8月8日～平成26年7月23日
森山 開次	ダンサー、振付家	インドネシア、ベトナム、シンガポール	平成25年10月18日～12月3日、平成26年1月4日～19日
はさ じ 挟土 秀平	左官技能士	アメリカ	平成25年10月19日～11月30日
み さい 森山 未来*	俳優、ダンサー	イスラエル、ベルギー、イギリス、スウェーデン、ドイツ、ロシア	平成25年10月21日～平成26年10月20日
長谷川 祐子*	キュレーター（学芸員）、大学教授	アラブ首長国連邦、ドイツ、モロッコ、フランス、アメリカ、モナコ、 アルメニア、グルジア、スウェーデン、ベルギー、イギリス、イタリア、 中国、チェコ、ハンガリー、スイス、ロシア、ポルトガル	平成26年3月12日～7月14日

〈短期指名型 ― 6組〉

団体名	分野	活動国	活動期間
びいまるど 藝〇座	伝統芸能（日本舞踊）	スペイン	平成25年9月19日、28日
チエルフィツチュ	演劇（現代演劇）	ギリシア	平成25年10月31日、11月2日
小野雅楽会	伝統芸能（雅楽）	ロシア、ドイツ	平成25年11年12日、14日、18日
株式会社わらび座	舞踏（民族舞踊）	ベトナム	平成25年12月19日、26日
山海塾	舞踊（舞路）	インド	平成26年1月15日、16日
声明の会・千年の聲	伝統芸能（宗教音楽）	アメリカ	平成26年3月7日

平成26年度（2014年）○派遣順

〈海外派遣型 ― 8名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
ひろこ 中澤 弥子	食文化研究者、長野県短期大学教授	フランス、ドイツ、ポーランド、ハンガリー、 イタリア、スロバキア、イギリス	平成26年8月10日～10月13日
林 英哲	太鼓奏者	アメリカ、トリニダード・トバゴ、キューバ	平成26年9月25日～11月4日
林田 宏之	CGアーティスト	クウェート、ヨルダン、レバノン、サウジアラビア、 バーレーン、ベトナム、タイ	平成26年11月1日～12月14日
若宮 隆志	「彦十蔦絵」代表	イギリス、フランス、中国	平成26年11月2日～12月3日
平野 啓子	語り部、かたりすと	ドイツ、トルコ	平成26年11月14日～12月15日
櫻井 亜木子	琵琶演奏家	エルサルバドル、ブラジル、アメリカ、イギリス、 イタリア、スイス、アルバニア	平成27年1月7日～3月21日
岡田 利規	演劇作家、小説家	中国、韓国、タイ	平成27年1月12日～3月2日
山井 綱雄	こんぼる 金春流能楽師	フランス、アメリカ、カナダ	平成27年2月1日～3月15日

平成27年度（2015年）○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動

〈長期派遣型 ― 7名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
青木 涼子	能×現代音楽アーティスト	アイルランド、フランス、ドイツ、デンマーク、 イギリス、ハンガリー、イタリア	平成27年6月20日～8月9日、9月17日～11月1日
柳原 尚之	さんさりゅうしか 近茶流嗣家、「柳原料理教室」副主宰	ニュージーランド、ブラジル、カナダ、アメリカ	平成27年7月29日～9月20日、9月28日～11月8日
矢内原 美邦	振付家、劇作家、 近畿大学文芸学部芸術学科舞台芸術専攻准教授	シンガポール、マレーシア、韓国、タイ、ミャンマー、 ベトナム、アメリカ、インドネシア、フィリピン	平成27年8月22日～平成28年1月31日
畠山 直哉	写真家	メキシコ、インド、フランス	平成27年9月2日～平成28年2月10日
小野寺 修二	コンテンポラリーダンス、マイム、 「カンパニーデラシネラ」主宰	ベトナム、タイ	平成27年12月15日～平成28年1月27日
藤田 六郎兵衛	能楽笛方 藤田流十一世宗家	イギリス、フランス、韓国	平成28年2月23日～3月30日
吉田 健一*	「吉田兄弟」、津軽三味線奏者	オランダ、スペイン、イタリア、ポルトガル	平成28年3月27日～5月25日*

平成28年度（2016年） ○派遣順 *印は、次年度も引き続き活動（予定も含む）

〈長期派遣型 ― 6名〉

氏 名	プロフィール	活動国	活動期間
佐藤 可士和*	クリエイティブディレクター、 株式会社サムライ代表取締役	アメリカ、イギリス、フランス	平成29年3月18日～4月17日
佐野 文彦*	建築家、美術家	イタリア、デンマーク、フランス、オランダ、アイスランド、 ドイツ、ベルギー、韓国、マレーシア、フィリピン、中国、インド	平成28年8月20日～平成29年5月1日
土佐 尚子*	アーティスト、京都大学教授	イギリス、フランス、アメリカ、シンガポール、タイ、 フィリピン、ニュージーランド	平成28年10月27日～平成29年4月29日
藤間 蘭黄*	日本舞踊家	アメリカ、チェコ、ウクライナ、ポーランド、ハンガリー、 スロベニア、ドイツ、ロシア、イタリア	平成29年3月29日～7月
柳家 さん喬	落語家	アメリカ、カナダ	平成29年2月5日～3月5日
山田 うん*	振付家、ダンサー	イスラエル、ジョージア、エストニア、イギリス、アルジェリア、 スペイン、フランス、東南アジア諸国、カナダ	平成29年3月28日～9月

文化庁文化交流使フォーラム 2016 秋－第 14 回文化庁文化交流使活動報告会－
主催：文化庁

Japan Cultural Envoy Forum 2016 Autumn

Host: Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

